
竜の住む谷

守原碧希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の住む谷

【Nコード】

N6362P

【作者名】

守原碧希

【あらすじ】

新興住宅街である陽光台団地へ引っ越してきた五年生・富士見野高は、新しい町にも友達にもなじめない。転入した小学校で、地元である落合の子と陽光台の子が対立していることも、メンバーが集まらず好きな野球ができないことも嫌でたまらない。

ある雨の放課後、高は友達の家へ遊びに行くのが嫌になり、家を出たまま団地の裏山へ入り込んでしまう。その山道で不思議な老人に出会い、「今夜、竹下（陽光台の旧名）に竜が出る。早く逃げろ」と警告される。

ありえないと思いながらも、老人の言葉にひどく不安を感じた高は、陽光台の住民たちに危険を知らせようとする。その熱意はクラスメート達や、クラスメートの祖父である元消防団員らを巻き込み

……
クラシックな児童文学だと思います。

《禁無断転載》

&l t; 1 & g t; (前書き)

修正を繰り返しつついくつかの児童文学賞に応募しては落選、最後になんとか「第9回 日本児童文学者協会・長編児童文学新人賞」の一次選考に残ったことで満足する。諦めることとし、お蔵入りを決めたシロモノです。

本当はなんとか自費でなく出版していただいて教材として使ってもらうのが夢でしたが無理でした……。何の教材かはネタバレになるのであとかきに譲ります。

<1<1>

1

ことのはじまりは車だった。

高は生まれてからずっと、この地方一の都会である城江のはずれ、堀川町にある団地に住んでいた。公営の古い団地には駐車場がなかったのも、家には車がなかった。

ところがある休みの日、お母さんがこんなことを言い出した。

「ねえお父さん、うちもそろそろ車買おうよ。川上さんちも買ったんだって。1台あったら、休みにみんなでお出かけできるし。こないだ駅の近くのお店でさあ、けっこう安くいい中古車見つけたの。駐車場は、こないだできた新しいところ借りればいいじゃない」

お父さんはいつも忙しく、休みの日でも家で仕事をしていたりして、いっしょに遊びに行けることなどほとんどなかった。それに、みんなで出かけるならこれまでのように、バスで城江の駅まで出て、電車に乗ればいい。高には、どうしてお母さんが車を欲しがるのか分からなかった。

でも、うちにかっこいい車があるのも悪くない。もしかしたらお父さんともっといっしょに遊びに行けるようになるかもしれない。そう思った高はなにも言わなかった。お父さんは、喜んでこの提案に賛成した。

ところが、こうして高の家にやってきた車は、高にとってはほんでもない話まで連れてきた。言い出したのは、またもお母さんだった。

「ねえねえお父さん、車だったら、この辺からでも会社、通えるんじゃない？ 城江を通らないで行けるんだから、今より早く着くかもよ。どう？」

そう言うお母さんの手には、赤い大きな文字で『陽光台団地、来春オープン!』と書かれたチラシがにぎられていた。1年前のことだった。

こうして5年生になった春、高は、できたばかりの陽光台団地へ引っ越してきた。

陽光台団地は、南東を走る国道と北西の山々にはさまれた新興住宅地だ。山あいから流れ出す黒川は、団地を大きく2つに分けるようにして、国道の南側を流れる中川と合流している。

国道ぞいには大きなマンションが3棟ならんでいて、その1階と2階に、スーパーやコンビニ、お医者さんや薬局などの施設がまつまっている。この3棟のマンションから山のふもとにかけては、なだらかな坂になっていて、広い道路が格子状に走っている。その両側には、よく似たつくりの新しい家々が、おもちゃの積み木のように並んでいる。高の家は、そのうちの1軒だった。

「やっぱり新しい町はキレイだし便利だし、いいわよね。みんなさっそうとクルマでお買い物だし。さっすが高級住宅街!」

お母さんはそう言って喜んでいるのだが、高はどうしてもこの町が好きになれなかった。

「学校から家までの間にスーパーだけしかお店がないなんて、こんなとこ絶対、人が住むところじゃない!」

堀川でずっと住んでいた公営の団地は、建物は古くてうす汚れていたし、家はせまかった。部屋が足りないのも、お父さんの書さいが高の部屋だった。さらにそこをお母さんが物置代わりにしていたから、部屋の中は迷路のようだった。

それでも、高はこの堀川の団地と町が好きだった。団地に住んでいるのはいい人たちばかりだったし、幼なじみの友達もたくさんいた。団地の外には小さな商店街があって、高はそのお店の人たちと

も顔なじみだった。呼び込みしている途中でも、必ず高に声をかけてくれた八百屋のおじさん。ぶすっとした顔で、黙っているんなおまけをつけてくれた本屋のおじいさん。知り合いをならべていけばきりが無い。町は古くて小さかったけれど、あたたかかった。

それに、なんといつても堀川には『堀川パイレーツ』があった。野球の好きな仲間が集まった草野球チームだったが、休日には、大学まで野球をやっていたという近所の島崎さんがコーチしてくれたし、同じような試合相手もいくつかあった。何度いどんでも勝てない『中野ホワイトソックス』に勝つことが高の夢だった。

それなのに、陽光台ではその野球ができなかった。学校の友達は誰も野球なんてやりたがらなかったのだ。近くには少年野球チームもなかったし、小学校にも野球部がない。子供の数が少ないからメンバーが集まらないのだという。

「お母さん、僕、堀川へ帰りたい」

がまんできず、お母さんにその気持ちをぶつけたこともある。

「なに言ってるの。すぐに慣れるわよ」

「だって野球もできないし、お店だってない。道歩いてても誰も人がいなくて気持ち悪い。堀川がいい」

「下のスーパーになんでも売ってるじゃない。便利できれいですてきなところよ。おうちも新しくきれいだし、アンタなんか、ついに自分だけの部屋が持てたじゃない。お母さんなんかねえ、高校生になるまでずーっとお姉ちゃんといっしょの部屋だったんだから。それに比べたらアンタは幸せよ」

ちゃんと話したつもりだったのに、お母さんには高の気持ちがまったく通じていない。

「……それに、お父さんと話できなくなった」

「そうなのよね。ここから車で通えば、会社へ行くのにかかる時間、そんなに変わんないと思ったんだけど。朝の道路ってそんなに混むのねえ……」

前からお父さんの帰りは遅く、高が寝る前に会えることはめった

になかった。それでも堀川に住んでいたころは、朝ごはんを食べているお父さんと少しは話すことができた。でも今は、高が朝起きて1階に下りると、お父さんはもう玄関で靴をはいている。

「お父さんおはよう」

「ああ、おはよう。行ってくるよ」

お父さんに話したいことは日に日にたまる一方だったけれど、いつ見ても急いでいるお父さんを引きとめることは、高にはできなかった。

陽光台から南の方へ歩いて15分ほどのところに、鉄道の落合駅がある。国道と線路にはさまれた細長い一帯には古くからの商店街があり、住宅が建ちならんでいる。これが落合の町だ。落合の子供たちは、この商店街を北東へ抜け、黒川を渡ったところにある落合小学校に通う。

そこへこの春、陽光台の子供たちがどっと転入したことから問題は起きた。落合の子と陽光台の子が対立しはじめたのだ。

高が転入した5年生のクラスでも、この対立は起きた。それもケンカするのではなく、お互いに無視しあいながら、かげでこそこそ悪口を言い合っていて、それが高には気持ち悪かった。どうして普通に仲良くできないのか分からない。それでもあたりまえのように、陽光台の子には『陽光台組』と呼ばれて仲間あつかいされ、落合の子には『竹下のやつら』と呼ばれて敵あつかいされた。

この『敵あつかい』でいちばん腹が立ったのは、クラブ活動のときだ。

高はしかたなくサッカー部に入ったのだが、サッカー部は落合の子たちばかりだった。

試合に出られることになり、はりきった高は、ドリブルで突っ込

んでくる敵チームの選手からうまくボールを奪った。ところが周りを見ると、なんとパスできる相手が全然いない。味方のはずのメンバーは、みんなそっぽを向いている。しかたなく自分でドリブルしてゴールを目指すと、同じ5年の野沢と木島が聞こえよがしに悪口を言っている。

「富士見野のやつ、まうたカッコつけてら」

「目立ちたがりはこれだからヤダよなあ。そんなに目立ちたいなら、ひとりでやれよ」

その声に気を取られたせいで、あっさり敵にボールを奪われてしまった。なにもなかったように試合はまた盛り上がる。腹が立ってそのまま家に帰りたくなった。

初めての調理実習のときもひどかった。

調理室へ着いた高は嫌な予感がした。同じ班のメンバーが、落合の子たちばかりだったのだ。理科室などでは、いつも出席番号順に6人ずつで班になっていた。ところが調理室では5人ずつが1つのテーブルに座る。それで、いつもの班とはまったくメンバーが変わってしまったのだ。

（なんで中条と同じ班になるんだよ。それに野沢に広瀬って、最悪のメンバーじゃないか……）

中条孝平は、落合の子供たちのリーダー格だ。大柄でもの静かなのだが、どこか『怒らせたらマズい』と思わせるような迫力がある。かげで落合の子をいじめているような子たちも、中条がメガネ越しにじろつとにらむと、とたんに小さくなってしまふ。

広瀬彰は、中条と同じように無口で、もっと無愛想だ。陽光台の子とは本当にひとことも口をきこうとしない。小柄なのだが、目つきがするどくいつもピリピリしていて、うっかり怒らせたらとんでもないことになると一目で分かる。

これに、中条の腰ぎんちゃくで、いつも『陽光台組』の悪口を言っている野沢が加わると、もう最悪だ。なにごともなく終わるとは

思えない。

嫌な予感は当たった。

「食えなくなるから竹下のやつはさわんなよ。邪魔だ邪魔だ！ あっち行つてろ！！」

調理実習がはじまるなり、野沢に追いはらわれてしまったのだ。

材料はみんな、高以外の4人で分けられてしまった。これではやることがない。先生もいるところで、材料の野菜を奪うためにケンカするということも、なんだかみっともない。

結局、高がなにもできずに突っ立っているうちに、その日の課題だった野菜のためはできあがってしまった。みじめだった。

「……それじゃ、私、盛るから、みんなもう座つてて」

「原く、4人分に分けるんだぞく」

おとなしい女の子の原が、できた野菜のためをお皿に盛りつけはじめた。それ以外のメンバーは、友達と話したり、他の班の料理をつまみ食いしたりして騒いでいる。

みんなが食べてるときに、ひとりだけなにも食べてなかったら目立つだろうな。先生に見つかったらなんて言おう……。ぼんやりそんなことを考えていると、横から声をかけられた。

「これ、富士見野くんの分」

原が、盛りつけ終わったお皿とみそ汁のおわんを自分の前に置いている。テーブルを見れば、きちんと5人分の食事がならんでいた。中条たちはもちろん、野沢もなにも言わなかった。

なんとも言えない気持ちで、出された料理を食べた。意外にもおいしかった。思わず「あ、うまい！」と口に出してしまい、他のメンバーに変な顔をされた。

味方のはずの『陽光台組』と仲良くするのもつらかった。

落合の子たちのリーダーが中条なら、『陽光台組』のリーダーは神山拓登だろう。小柄で色が白くて、どう見ても強くはなさそうだが、堀川では見たことがないぐらい頭がいい。なにを聞いても知っ

ているし、学校のテストでは94点以下だったことがない。そのせいか、いつも自信たっぷり……といえはカッコいいのだが、いつもえらそうで自分勝手だ。でも大人には気に入られているし、おしゃべりで話がうまいので、みんなつい従ってしまふ。近所に住んでいる春日翼など、学校でも塾でも拓登べったりで、まるで子分みたいになっている。

でも高は、どうも拓登たちのグループが好きになれなかった。だいたい、みんな外で遊ばない。遊びに行くと、どんなに天気がよくても部屋でテレビゲームをしたり、テレビ番組の話やクラスメートのうわさ話をしたりしている。堀川では、遊ぶといえば野球にサッカーにバスケ、ときには探検に魚釣り……といった具合だったから、その違いに高はとまどった。

部屋でじっとしているのに疲れて、いちど聞いてみたことがある。「こんなゲームでサッカーやるより、外で本物のボールける方が面白くないか？」

拓登の答えはこうだった。

「な〜に言っただんだフジヤマ。オレたちみたいに頭のいい人間はな、つまらない選手じゃなくてカントクになるんだ。頭を使って楽に勝つ。これがジンセイのゴクイってヤツさ。汗かいて走り回るなんて、落合のやつらみたいなのにかかせとけよ！」

そうだそうだ、と集まった数人が笑い、拓登は得意げにふんぞり返った。みんなの笑い声の中で、高はひとりぼっちになった。

高に『フジヤマ』というあだ名をつけたのも拓登である。高の名字が富士見野だからだと言う。

「なんでそれで『フジヤマ』になるんだよ」

「だって『富士』ったらあれだろ、富士山。『スシ〜、ゲイシャ〜、フジヤ〜マ』。だからフジヤマ」

変な外国人みたいなしゃべり方に、聞いていた数人は大笑いして喜んだ。でも、高はこれを聞いて、ますますこのあだ名が嫌いになった。なんだかバカにされているみたいだ。

「それならタカシでいいじゃないか」

「分かってないなあフジヤマは。タカシとタクトじゃ、まぎらわしいじゃん。なあ？」

するとみんな「そうだそうだ」と拓登に賛成する。もうそれ以上はなにも言えなかった。

あの調理実習の後なんて最悪だった。

「オレ見たぞ。原のやつ、フジヤマのこと好きなんじゃねーの？」
「そんなんじゃないよ！」

その日の放課後も、高は拓登の家に呼ばれていた。丸い顔に大きな目がかがやかせた拓登にそう言われて、びっくりした高は思わず大声を出した。

「えっ？ なにがあったんだよ拓登」

「今日の調理実習でさあ、フジヤマ、落合のやつらに仲間はずれにされてたんだよ。あいつら、フジヤマには食わせないつもりだったんだろ。そしたら原がさ、こっそりフジヤマの分盛りつけて、並べてやってんの。どう思う？」

「アヤしい〜」

その日も遊びに来ていた春日がニタニタしながら身を乗り出してくる。

「だろ？ だろ？ 中条たちの目の前で堂々とやってんだぜ。もうあれだな、愛だよな、アイ」

「違うって!!」

「むきになつてら。ますますアヤしいじゃん。もしかしておまえら、デキてんの？ ラブラブなの？」

「違う!!」

また大声を出してしまったが、拓登たちは高の言うことなど全く聞こうとしない。

「うっひゃ〜、いつの間に!？」

「フジヤマって体デカいもんな。実はけっこう進んでたりして〜」

「つくかフジヤマ、もうちょっとマシなの選べようせならさ」。
落合の、よりにもよってアレはちよつとどうよ。なあ？」

みんなはどつと笑い出した。高は、自分の声が誰にも届いていないような気がした。

それでも、そこまでならまだ良かった。

数日後、ふたりで晩ごはんを食べていると、なんとお母さんがこんなことを言い出すではないか。

「あのねえタカシ、あの、落合の電器屋さんの女の子と仲がいいって、本当？ お母さん、女の子とつき合ったらダメとは言わないけど、落合の子はちよつとどうかと思うわ。陽光台の方が、感じいい子いっぱいいるじゃない？」

持っていた茶わんをテーブルにたたきつけると、自分の部屋へ走り込んだ。本当は、茶わんをお母さんに投げつけたいぐらいだった。ああ腹が立つ腹が立つ腹が立つ。バカなうわさを信じこんであんなことを言うお母さんにも腹が立てば、そんな話をお母さんに吹き込む拓登にも腹が立つ。

だいたい、高にはこのごろちよつと気になる女の子がいた。同じ『陽光台組』の会田桜子だ。さらさらした長い髪にぱっちりした大きな目、そしていつも女の子らしいきれいなかつこうをしている。いかにも都会育ちらしい話し方はちよつと大人っぽい。こんな女の子はこれまで見たことがなかった。

気になり出したのは、あのうんざりするような部活動のときだった。どこの部活に入っているのか、会田はよくサッカー部の練習を見ているのだ。例の試合でボールを奪ったときも、やっぱり会田はいた。かすかに「ナイスプレー！」という声を聞いたような気がする。

これが話に聞く恋なのかどうか、高にはよく分からなかったけれど、とにかく気になるのはたしかだった。それなのに、勝手なうわさとはいえ他の女の子と、しかもクラスの中でも特にぱつとしない原と勝手にくつつけられるなんて、絶対に許せない。

拓登たちといっしょにいるといつもそんな調子だったので、高はあまり仲良くしたくなかった。でも陽光台の子とつき合うのをやめれば、友達が誰もいなくなってしまう。

それに、拓登の方はやけに高を仲間あつかいして声をかけてくるのだ。高の背が高くて目立つからなのか、成績順でクラスを分ける『英美塾』で、まぐれで1人だけ拓登と同じAクラスになったからなのか、理由はよく分からない。そして、人にさそわれると、嫌でもうまく断れないのが高の性格だった。

堀川が恋しかった。毎日のように楽しく遊んだみんなに会いたかった。落合駅から城江の駅までは、電車で40分ほどだ。おこづかいをためれば行けないことはない。でもついこないだ、みんなに別れを惜しまれながら引越したばかりなのだ。こんなに早く遊びに行くのは、なんだかみっともない。

それでもさびしくて、何度も友達にメールを送った。が、堀川から返ってきたのは、高にとっては最悪の知らせだった。なんと堀川パイレーツが、あの中野ホワイトソックスに勝ったというのだ。

『1点差だったから、最後はもうどうなるかと思ってヒヤヒヤしたけど、正樹が素晴らしい球投げておさえ切ったんだ。すごい試合だった！書ききれないからまた電話で話す』

よりにもよって僕がいなくなったとたんに勝つなんて。なんだか僕がチームの足を引っ張ってたみたいじゃないか――

『がんばったな。おめでとう』とだけ書いたメールを出した。電話はしなかった。

7月に入ると、陽光台では毎日のように雨が降った。休み時間も体育の時間も部屋の内に閉じ込められる日々は、高にはつらかった。外で思いきり暴れたかった。

そんなある日、掃除当番だった高はひとりで家へ帰ることになった。

黒川ぞいの坂道をのぼる。黒川は、ふだんは子供でもまたいで渡れそうなぐらい細い川なのだが、雨で水の量が増えて急に川らしくなっていた。

ひとりだったので、ジョンのいる家に寄った。ジョンは大きなシエパードで、川ぞいにある家の庭で放し飼いにされている。拓登たちはみんな犬が嫌いらしく、いっしょに帰るときには、ここへは寄らせてくれない。

「ジョン、元気か？」

門のとびらごしに声をかけると、犬小屋の中にいたジョンが、いつものように飛んできた。雨に濡れるのもかまわず大喜びでしっぽをふってくれるのだが、金属格子のとびらが邪魔で、うまくなられない。

「雨がひどいから、今日はもう帰るよ。お前も気をつけるんだぞ」
さびしそうに鳴くジョンを残し、家に向かって歩き出した。

聞こえてくるのは、傘に当たる雨音、ザーザーと勢いよく流れる川の音、そして自分の足音だけだ。真新しい家がずらっとならんだ町は静かすぎて、住んでいた人がみんなほろんでしまった『町の化石』みたいな気がした。

堀川に住んでいた頃には、仲良しの犬も顔見知りの猫もいた。陽

光台には猫がいない。声をかけられる犬はジョンしかない。それどころか、晴れた日でも歩いている人を見かけない。誰もいない。なにもいない。

（こんな雨もこんな町も大っ嫌いだ。引越なんかにしたくなかった）

家に着くと、濡れたランドセルを玄関に投げ出した。その日は塾がなかったので、かばんを置いたら遊びに来るよう拓登に言われていたのだ。

「お母さん、拓登んちへ遊びに行ってくる」

「こんな雨なのに？ 気をつけてね。雨、ひどくなるみたいだから、早く帰ってくるのよ」

拓登の家は、川ぞいの道を二すじ山側へのぼり、左へ曲がって2軒目だ。

いつものように川ぞいの道を左へ曲がろうとして、そこで高の足は止まってしまった。

拓登の家が見える。2階にある拓登の部屋に電気がついていて、

きつともう、いつものように春日たちが来て騒いでいるはずだ。

気がついたときには、そのまま川ぞいの道をまっすぐ歩き出していた。どこへ行こうとしているのか、自分でも分からなかった。雨はさっきより激しくなっていたけれど、家へ帰る気にはなれなかった。

黒川にかかるいちばん上の橋をすぎてさらにまっすぐ行くと、団地のはずれに着く。舗装された広い道はそこで終わり、土に丸太をうめて作られた、せまくて急な階段がその先に続いている。この階段をのぼり、山のふもとにある細長い公園の横を抜ければ、そこはもう古い山道だ。この山道は古い登山道で、栗の木山から、その奥の久栄山の方までずっと続いているのだという。

道の端には古くて頼りない木の柵があって、その外側は谷になっている。今はそこを、怖いぐらいに勢いを増した黒川の濁流が音を

立てて流れていた。

たまに階段代わりの丸太がうめてあるだけの山道は、雨のせいでかなりぬかるんでいた。よくよく気をつけないと足をすべらせてしまう。柵の間から川に落ちたらおしまいだ。

風に傘を持っていかれないよう引き寄せると、足元に神経を集中させて歩いた。スニーカーはすでに泥だらけで、内側まで水がしみてきている。あぶないことも、戻った方がいいこともよく分かっていた。それでも帰りたくなかった。歩き続けていると、雨の音と川の水音、そして泥のにおいがやけに強く感じられた。

そうして長い坂を登り切った高は、そこでぎよつとして足を止めた。人がいたのだ。陽光台でも人の姿を見ることはなかったのに、こんな山の中で人に会うとは思わなかった。

しかもそこに立っていたのは、白い髪に白いひげのおじいさんだった。なんだか灰色のゆかたみたいな服を着ている。まさかこんな雨の日にわざわざ、しかもあんな歩きにくそうなかっこうで、この山道をずっと歩いてきたんだろうか。でもそれにしては濡れているように見えない。

白くて長いまゆげの下から、おじいさんがじつと見つめている。

高はこわごわ声をかけた。

「えーと、あのう、こんにちは」

「コヨイネノコク、リュウガデル」

「え？」

「コヨイネノコク、リュウガデル」

「なに!？」

おじいさんがぼそぼそと口にする言葉が、高にはまったく分からない。首をひねっていると、おじいさんは一生懸命にくりかえす。

「コヨイネノコク、ショウシニ、リュウガタケシタヲオソウ。ミナハヤクニゲヨ」

「……えーと、『今宵』に、『竜』?」

必死でなにか伝えようとしているようなので、なんとか聞き取る

うとがんばってみた。『今宵』なんて、なんだか時代劇の言葉みたいだ。そう思ったら少し分かってきた。

おじいさんは軽くうなずくと、念を押すように、今度はゆっくりと同じ言葉をくりかえした。

「今宵、ネノコク、シヨウシに、竜が竹下を襲う。みな早く逃げよ」
「今晚の『ネノコク』に、竜が出る!？」

てっきり聞きまちがいだと思ったのに、おじいさんは深くうなずいた。

「竜は久栄の奥で目ざめ、黒川の流れに乗り、ふもとの村を襲う。早く逃げねば、みな竜にのまれる」

「竜なんてただのお話だよ。そんなの出るわけないじゃん!」

きびしい顔をして自分を見ているおじいさんに、高は必死で言い返した。竜なんて、おとし話やゲームの中のものじゃないか。本当に、しかも今夜現れるなんて、うそに決まってる。

「……竜は出る。何度も出た。竹下の民を大勢のんできた。村人が逃げねば、また今宵ものまれる」

「『村人』って、どこの村の人？」

「竹下に住む者」

「……『竹下』って、なに!？」

「竹下は山のふもと、黒川の流れ出る場所。早く行け。村人に伝えよ。竜が川を下る前に!」

おじいさんが大声でそう言った瞬間、山道の先にある久栄山の方でぱつと雷が光った。地響きのようなすさまじいゴロゴロ……という音とともに、雨がいつそう激しく降り出した。

あの稲妻の下で竜が目ざめた、そう感じた。ぞっとした。『竹下』って、陽光台のことじゃないか。だとしたら、陽光台を今夜、あの竜が襲う――

おじいさんにあいさつもせず背を向けると、来た道を引き返した。ぬかるんだ山道の、しかも下り坂であわてはあぶないと分かっただけだけれど、それでも『一分一秒でも早く町へ戻りたい』と

あせる気持ちをおさえるのは難しかった。

けれども、陽光台へ戻った高は途方にくれた。どうしていいのか分からない。

山の中ではおそろしく聞こえた『竜が出る』という言葉も、見慣れた陽光台の町の中ではとても信じられなかった。

でも『変なおじいさんにうそを聞かされただけだ』と思うとうしても、なんだか気味が悪い。黒川は、4メートルほどの川幅いっぱい濁流になっている。雨も、高がこれまで見たことがないようなどしゃ降りだ。この雨も黒川も、そしてさっきの雷も、悪い前ぶれみたいな気がする。

しかし、それでも、やっぱり、どうしていいのか分からない。道を走り回って大声で「今晚のネノコクに竜が出るぞー！！ みんな早く逃げろー！！」と叫んだって、みんな信じるわけがない。「変な悪ふざけをして」と怒られるどころか、「富士見野さんちの子、ちょっとおかしいんじゃないの？」と言われるようになるだけだろう。

もうこのまま家へ帰ってしまおうか。でも、もし本当に竜が出たりしたら、家にいたってあぶないはずだ。お母さんを連れてどこかへ逃げたらどうだろう。でも、もしあのおじいさんが言ったとおり、他の人たちが竜に殺されてしまったとしたら、それはみんなに危険を知らせなかった僕のせいだ……

小さいころ、まだ今ほど忙しくなかったお父さんと、よく近くの川原へ行ってキャッチボールをした。川原へ行く途中、お父さんはよくこんな話をしていた。

「高、困ってる人を見たら、助けてあげないとダメだぞ。人間ってのはな、ひとりじゃ生きていけない。みんなで助け合って生きていくもんなんだ。みんなが『自分さえ良ければいい。他の人なんか知らない』ってなったら、みんなうまくいかなくなるし、おまえが困ったときだって誰にも助けてもらえなくなる。野球だってそうだ。

ひとりでいくらがんばったって勝てない。みんなで弱いところをカバーし合って力を合わせて初めて勝てるんだ」

会社でもすぐ人を助けてあげるからお父さんはいつも忙しいんだと、お母さんはぶつぶつ言っているけれど、それでも高はそういうお父さんが好きだった。今、お母さんとふたりだけで逃げるのは、お父さんの言っていた『自分さえ良ければいい。他の人なんか知らない』ってことのような気がする。そんなことしたら、きっとお父さんはがっかりする。お父さんをがっかりさせるような子にはなりたくない。

だしたらやっぱり、なんとかみんなに危険を知らせて、安全なところへ逃げてもらうしかない。

大人に逃げてもらうためには、大人に相談した方がいいんじゃないだろうか。でもこんなこと、いったい誰に頼めばいいんだろう。誰がこんな話を信じてくれるだろう。お母さんには絶対言えない。

「バカねえ、アンタはゲームのやりすぎなのよ」と笑われるのは目に見えている。

お父さんなら信じてくれるかもしれない。でも今ごろ、お父さんはまだ仕事中だ。「お父さんの仕事中には電話かけちゃダメ!」とお母さんにきびしく言われている。

そうだ、学校へ行ってみよう。担任の中倉先生は若いから無理そうだけど、校長先生なら、なにか知ってるかもしれない。そう決めた高は急いで学校へ向かった。

学校はまだ閉まっていなかった。でも先生たちが「雨がひどくなりそうだぞ。早く帰りなさい!」と、残っていた子供たちを送り出している。

その脇をすりぬけ、急いで校長室を目指した。ノックもせずに飛び込むと、帰りじたくをしていた校長先生が驚いた顔をした。

「おや? こんな時間にどうしたかな?」

「……あのっ……」

『人のいいおじいさん』という感じの校長先生は、手を止めてにこにこ笑いかけている。それでもやっぱり『陽光台には竜が出るって本当!?』とは言出しづらい。

「……あのっ、あの、し、知ってる人に聞いたんですけど、『今宵ネノコク』の『ネノコク』って、なんですか!?」

「『子の刻』といえば、だいたい夜の12時ごろだ。昔の言い方だね」

「それじゃ、えーと、なんだったっけ、し、『ショウシ』っていうのは……?」

「『正子』かい? 子の刻の中心、つまり夜の12時のことだよ。そんな言葉、よく知ってるねえ」

ということとはつまり、あのおじいさんは『今夜12時に竜が出る』と言っていたのだ。もう5時近い。時間がない。

「せっかく来てくれたのに悪いんだが、今日はこれから雨がひどくなるらしい。君も先生も、早く家へ帰った方が良さそうだ。お話はまた今度じゃダメかな?」

「ええと……あ、あの、『竹下』ってどこのことですか!?」

あわてた高は、さっきあのおじいさんに聞いた質問をくりかえしてしまった。

「『竹下』？ ああ、君は陽光台の子か。『竹下』っていうのは、陽光台の古い地名だよ。ついこの間までは町の名前も『城江市竹下何番地』だったんだが、新しい団地が『陽光台』って名前に決まったから、市もそれに合わせて町の名前を『陽光台』に変えたんだ。それじゃまた明日ね。気をつけて帰るんだよ」

「……あ、ありがとうございました」

部屋を出る校長先生について歩いているうちに、正面玄関に着いてしまった。やっぱりそれ以上の話は切り出せそうにない。高は校長先生に頭を下げると、傘をさして校庭へ出た。

さっき先生たちが子供たちを帰らせていたせいかな、校庭にはもう人影がなかった。強い雨が降り続いているので、あちこちに大きな水たまりができています。

「……あれっ？」

裏門の方から出てきたのか、校門の外の道を大柄な子が歩いている。その姿には見覚えがあった。同じクラスの中条だ。

（そうだな、あいつに聞いてみたらどうだろう。ずっとこの辺に住んでるんだったら、竜の話のなにか聞いたことがあるかもしれない）いつもだったら、そんなことは絶対にできなかっただろう。でも今はとにかくやるしかない。なにしろ今夜12時には竜が出るというのだ。

雨でぬかるんだ校庭を強引に突っ走り、途中で足をとられて転びそうになりながら、なんとか高は中条に追いついた。

「おい中条、ちょっと！」

雨音に負けまいと大声で呼ぶと、中条はびっくりしたように振り向いた。

「おまえ、陽光台に……『竹下』に竜が出るって話、知ってるか！？」

まじめに言いながらも、バカにされることは覚悟していた。しか

し、中条は笑いもせずあきれもせず、きびしい顔をした。

「誰に聞いた？」

「……さっき、山で」

「栗の木山の、石碑のところか？」

「石碑？」

「上の神社へ登る脇道のところだ」

「うん、たぶんそこだと思う。そこにこう、髪とひげの白いおじいさんがいて……」

「出るって言ったのか？」

「今夜の12時だって言ってた」

「マジかよ……」

中条は携帯電話を取り出し、時間を確認すると、途方にくれたような声を出した。高は、中条が学校に携帯電話を持ってきていることがちよつと意外だった。

「富士見野、ちよつといっしょに来てくれるか？」

言いながらさっさと歩き出す。それきり振り向きもせずどこかへ電話している。高はついて行くべきかどうか迷ったが、ここはもう中条に賭けるしかないと心を決めた。

「じいちゃんは今、家にいる」

「中条のおじいさんとこへ行くの？」

「ああ」

急に話しかけてきたかと思えば、またふつつりと口をつぐんでしまう。ずっと黙っていっしょに歩くのはおちつかないので、高は自分の方から話しかけてみることにした。

「……今日は、ずいぶん遅くまで学校に残ってたんだな」

「ああ、今日は呼び出しがなかったから、図書室にこもってた」

「図書室う！？」

五分刈り頭に、色黒でがっちりした体格の中条は、いかにも『スポーツが好きで勉強は嫌い』なタイプに見える。静かに本を読んでいる姿が想像できない。

「うちは本なんか買ってもらえないからな。時間あるときはたまに行く」

「そんなに本好きなのか。それじゃおまえ、読書部か？」

「いや。本の感想とか言わせれんのイヤだし、クラブは家庭科」

「……………家庭科？」

そういえば5月ごろ、拓登たちが、バカにした口ぶりでそんな話をしていたことがあった。でも高は、てっきり意地の悪い作り話だと思っていた。

「ああ。料理、好きだし。みんなが喜んで食ってくれと気持ちいいし」

「……手芸とかは？」

「嫌いじゃない。なんも考えないで集中できるから」

「なんで運動部入らないんだよ。おまえ、体育、得意なのに」

「陸上は好きじゃないし、サッカーやバスケットは、すぐ『よそと試合やるから』つつって呼び出されんのがイヤだ。時間なくなる」

「それじゃ野球は嫌いかな？」

陸上、サッカー、バスケットきたら、高としてはどうしてもそう聞かずにはいられない。

「笠松は好きだ」

「笠松って、あの、シーガルの笠松！？」

「決まってるだろ」

思いがけないところで思いがけない名前を聞いて、高は思わず身を乗り出した。笠松は、今のプロ野球一の名キャッチャーだ。

「いいよな笠松！！ 僕、尊敬してるんだ。あんなすごいリードできるのに、バッターとしても超一流なんてすごいよ」

「おれなんかこれ、笠松のまね」

空いている方の手で自分のメガネをつまむと、中条はニヤツと笑った。それだけで、高には中条がなにを言っているのか分かった。笠松選手はメガネをかけているのだ。

「ホントか！？ それ、伊達メガネなのか」

「伊達じゃない。でも『授業中だけかければいいから』って言われたメガネ、ずっとかけてるのは、笠松のまね」

「いいなあ」

「よくないって。富士見野、おまえ、野球好きなのか？」

「好きだよ。見るのも好きだけど、やるのはもっと好きだ！」

「ポジションは？」

「ずっとキャッチャーやってた」

「それで笠松好きなのか。着いたぞ。ついて来いよ」

言われて周囲を見れば、もう落合の商店街の半ばまで来ている。

中条は寿司屋の古い引き戸を開けると、さっさと店の中へ入ってしまった。高は驚いたが、ここで中条とはぐれるわけには行かない。

あわててその後を追いかけた。

店の奥から家に上がり、階段をのぼると、2階は座敷になっていた。古そうなちゃぶ台の前に、骨張ったおじいさんが座っている。

「じいちゃん、『竹下村の碑』で村長むらおさが出た」

階段に近い側に座った中条が話をはじめている。この人が中条のおじいさんらしい。

「見たのか？」

「おれは見えてない。富士見野が見たって言ってる」

中条が手で指したので、おじいさんは高の方を見た。ランニング1枚というかつこうであぐらをかいているおじいさんは、弱々しい感じがどこにもない。そのするどい目つきに高は緊張した。

「まあ、そんなとこ突っ立ってないで座んな。見たことない子だな。友達か？」

表情を和らげて手招きすると、おじいさんはまた中条と話しはじめた。

「……クラスメートだよ。竹下に越してきたんだ」

「ああ、団地の子か！ どうりで見覚えねえはずだ。それじゃ『初めまして』だな。名前は？」

「富士見野高です。初めまして」

堀川ではよく『団地の子』と呼ばれていたから、そう呼ばれると、なんだか堀川へ帰ったような気がした。ぺこりと頭を下げると、おじいさんは笑顔になった。

「おう、高くんか。おれは中条孝市、こいつのじいさんだ。で、いったいなに見たって？」

それで少し緊張が解けた高は、さっき中条にした話をまたくりか

えした。

「3ヶ月前に来たばかりの高くんが見たってことは、まあまちがいなさそうだな。孝平、消防団の詰所へ行くぞ。カッパ取ってきてくれ。急げ！」

中条にそう言い残すと、おじいさんは部屋のすみにある黒電話を使いはじめた。

「ああもしもし、おれだ。今夜、黒川があぶねらしい。これからそっちへ行く」

それから10分後、高は消防団の詰所にいた。おじいさんに、詰所へ寄って欲しくれないかと頼まれたのだ。落合には陽光台団地のことにくわしい人がいないので、話が聞きたいのだという。

中条には、あぶなそうだからもう家へ帰った方がいいと言われた。高もそう思ったし、お母さんが心配するだろうとも思った。でも、陽光台の人たちはまだ誰も逃げていない。中条のおじいさんたちが、これからどうするつもりなのかも分からない。本当に、みんなを竜が襲ってこない場所に避難させてくれるのか。それが分からないまま家に帰るのも不安だった。それで、ふたりといっしょに行くことに決めたのだ。

「中条のオヤジさん、黒川があぶないって本当か!？」

詰所についたとたん、おじいさんを待っていたらしい男の人がかけ寄ってきた。レインコートを着たその人は、全身ずぶ濡れだった。

「おう。団長、来てくれたのか。やっぱ団員は出はらってんのか」

「みんな中川で土のう積みだ。それでも手が足りない。もう警戒水位超えたつてのに、どんどん水かさが増してる。こりゃちよつとマズいことになりそうだ」

中川は、鉄道のすぐ南側を平行して流れている。もう海に近いので川幅も広く、いつもはおだやかな川なのだが、どうもその中川さ

えあぶないらしい。

「で、黒川は？」

「今夜12時あたり、土石流が来る」

話を聞いていた高は不安になってきた。自分はたしかに『竜が出る』と言ったし、おじいさんはちゃんと分かってくれていたようだった。それなのに人には『土石流が来る』と話している。まさか聞きまちがえられたんだろうか。『リュウ』がつくところはちよつと似てるし……

「地図はあるんだな。よし」

見ると、陽光台の大きな地図が、机の上に広げている。おじいさんはその地図を取ると、詰所にある機械でコピーを取ってくるよう中条に言いつけた。中条について行きかけた高は、おじいさんに呼び止められた。

「高くん、陽光台の自治会って知ってるか？ おとなりから回覧板とか回ってくるか？」

「……よく分かんない。回覧板はこっちでは見たことないです」

高としては、話しかけられたついでに「出るのは土石流じゃなくて竜です」と訂正したかったのだが、そのすきがない。

「チツ、マズいな。そりゃ、向こうの連絡先は手に入らないかも知れねえ。お、スーさん、どうだった？」

先ほど『団長』と呼ばれていた男の人が、首を横に振りながら戻ってきた。

「ダメだ。市役所の武石さんは、中川の方で全然手が空かない。『今夜12時ごろ』の件だけは伝言しといたが、団地の住民の連絡先までは頼めなかった。自治会の連絡先は分かったんだが、いくら電話しても出ない」

「こりゃ一軒一軒回るしかねえな……」

「車走らせて呼びかけたらどうだ？」

「団長、この雨見てから言え。これじゃ、いくら拡声器使ったって聞き取れねえよ」

「一軒一軒か……。電話番号さえ分かれば、もっと早く大勢に知らせられるんだがな……」

『団長』は、顔をしかめながらいかつい腕時計を見た。つられて高も時計を見た。もう5時半を回っている。

「コピーできた」

コピー機に張りついていた中条が、数枚の紙と、さっきの地図を持って戻ってきた。その数枚のコピーをテープではり合わせると、なかなかきれいな地図になった。

するとおじいさんは、マジックでその地図に変な線を引きはじめた。VとUの中間みたいな、変な形だ。Vの先が、地図の真ん中よりやや下、黒川の真上あたりに来ている。

「この線の内側くらいは、どうしても避難させとかねえとダメだな」「そうだな。とにかくそこだけでも、早く避難を呼びかけよう。それじゃ、もう少ししたら出るぞ。役所と消防に連絡して、あと、ちよつと団員をこっちへ回すよう言ってみる」

「団長、土手の方からここへ呼んだら遠回りだ。陽光台にでかいスパーがあつただろう。あそこの駐車場で集合だ。孝平、その地図、うまくたたんでおいてくれ」

高にはどうもよく分からなかったが、とりあえず、山と黒川の近くに住んでいる人は避難させるらしい。それなら黒川に乗って竜が出てきても、近くの家には人がいないのだから、いきなり襲われる人は減るだろう。

（でも、川の近くに人がいなくなつて、竜って飛べるんじゃないか。たっけ。それに、国道を越えて行っちゃったら、川下の人はあぶないじゃないか……）

黒川を下ってきた竜が、国道のあたりで空へ舞い上がり、遠く城江の市街地めざして飛んでいく、そんなアニメのような光景が頭に浮かんだ。

高の不安をよそに、おじいさんはなにか書きはじめた。のぞいてみると、それは避難を呼びかけるビラだった。

『◆ 早めに避難しましょう!! ◆』

黒川で土石流発生 of 危険が非常に高まっています（深夜12時前後が最も危険です）。以下の地域にお住まいの方は、至急、落合集会所（落合4・1・国道の落合交差点の西側）へ避難して下さい。

※黒川が増水して橋や道が通れなくなる危険があります。早めの避難を!!

・ 陽光台1丁目 2・3・4番地の川側、5番地3・4、6番地の全域

・ 陽光台2丁目 2・3・4番地の川側、5番地1・3、6・7番地の全域

上記以外の陽光台地区にお住まいの方は、貴重品や畳などを2階へ上げ、自宅の2階へ避難するようにして下さい。

もし土石流が発生した場合、2度、3度と繰り返し起こる可能性があります。しばらくは安全な場所から動かないようにしましょう

落合

消防団

須坂（090-△△△△△

一×××××）

中条（090-×××××

一◇◇◇◇◇）』

「じいちゃん、この番号、おれのケータイだろ」

「『おまえの』じゃねえよ。うちのだ。とっとと貸せ。おれは駐車場で、みんなから連絡受ける係やるから」

中条から携帯電話を取り上げると、さっさとビラのコピーを取りに行ってしまう。

「あんなのがささっと書けるなんて、中条のおじいさんって、すごいんだな」

「じいちゃんはずっと消防団の団長やってたからな。こういうのはくわしいんだ。……じいちゃん、おれ、鳥居のばあちゃんのところ行ってくるわ」

「なにしに行くんだ？」

「ばあちゃんの家、避難しなきゃいけない区域の中じゃん。ばあちゃんひとりじゃあぶないから、おれが集会所まで連れて行く」

「暗くなるし、ますます雨きつくなるから気をつけろ。ドブとマンホールは避けるよ。停電するかも知れねえから、その懐中電灯持っていていけ。あーと、それから、避難の準備する時間があるだろ。その電話で、今から準備しとくよう、ばあさんに言っとけ」

「分かった」

おじいさんの返事を聞くと、中条は詰所の電話へ走って行った。なんの話か分からず、きょとんとしていると、さっきのビラのコピーをかばんに入れているおじいさんに話しかけられた。

「今、孝平が竹下へ行くつつつてるから、高くんは家まで送ってもらうといい」

「送ってもらわないです。小さい子や女の子じゃないし」

「あのな高くん」

かばんをビニールで包み終わったおじいさんは、少しかがんで高の目をのぞきこんだ。

「いつもだったらな。だが、こういうどしゃ降りの、しかも夜は、大人でもあぶねえんだ。見通しはきかねえ。道路はすべる。車もすべって止まれねえ。子供1人でなんて絶対に歩くな。あとな、絶対に川のそばへは近づくなよ。川ぞいの道歩くのもダメだ。約束だぞ」

そのとき、詰所の入口から、つえをついたおじいさんがひとり入ってきたので、話はそこまできた。

「ああ、大西さん、来てくれたのか」

「なに、私でもここの電話番号くらいはできる。みんな、気をつけてな」

「行くぞ。早く乗れ!!」

入口のすぐ外に止まった車の運転席から『団長』が叫んでいる。
「高くん、孝平、スーパ―までいっしょに乗っていけ。ちよつとでも濡れねえ方がいい」

ばたばたと3人は車に乗り込んだ。もう6時近くになっていた。

「……あゝ、キツかった……」

「6人乗りはキツイよな……」

『団長』は、スーパーへ向かう途中、落合の住宅街でさらにふたりを車に乗せたのだ。そのふたりも、さっきの大西さんも、以前は消防団員だったのだそうだ。

マンションの1階にあるスーパーの駐車場には、すでに、黄色いレインコートを着た男の人が3人来ていた。今まで中川の堤防で土のうを積んでいたのだという。

「夜の12時ごろがあぶないって、なにか前兆でもあったのか？
誰がそんなことを」

「くわしくは言えんが、あの辺の山にくわしい人だ」

「ってことは、最低でも9時までには避難完了させておきたいな」

「できるだけ早いほうがいい。黒川があふれたら避難もあぶない」

「しかし、この範囲の外だって、1階にいたらあぶないかもしれないぞ。なんとかみんなに知らせる方法はないのか？」

集まった7人が大声で話しているのを聞きながら、高は中条といっしょに外へ出た。雨はさっきよりさらに激しくなっていた。

「中条、これからどこへ行くんだ？」

「おまえを家まで送っていく」

「そうじゃなくて、その後」

「ああ、鳥居のばあちゃんのところへ行く」

車が来ないか注意しながら、そして足元にも気をつけながら、ふたりは山の方へ向かって歩いた。街灯の明かりが雨でぼやけている。
「『鳥居のばあちゃん』って誰？ どこに住んでるの？」

「ばあちゃんは、じいちゃんの妹だ。おれが小さい頃からかわいがつてくれた。黒川のいちばん上の橋んところの道、西へ行くと、角んところに畑があるだろ」

「ああ、あの交差点のどこ。なんかいろいろ植わってて、中に小さい家があって」

「それがばあちゃんち」

「へえ」

たしかに団地の西の端には、ぽつんと畑がある。真新しい陽光台の町なみの中で、そこだけが浮いていて、小さい畑なのに目立っていた。

「富士見野、おまえんちって、たしかこの辺で曲がるんじゃないか？」

「えっ？」

言われてみれば、もう高の家の近くである。この角で曲がらないと行きすぎてしまう。

でも、本当にこのまま帰っていいんだろうか。おじいさんは『子供1人で出歩くな』と言ったのに、僕がここで帰ったら、中条はここからひとりで歩くことになる。それじゃなんだか、『陽光台組』の僕の話ちゃんと聞いてくれた中条を見捨てて帰るみたいだ。それに、なんだか消防団の人たちは人手が足りないみたいだったし、避難させたいところ以外に住んでる人にも、電話で注意したいみたいだったし……

「そうだ!!」

「なんだ!？」

「寄りたいところがある。すぐだから、ちょっと来て」

「おい富士見野!!」

交差点をまっすぐ突っ切ると、ふたつめの角で川の方へ曲がった。その先にあるのは、今日行くはずだったあの家だ。

「どこ行くんだよ」

「拓登に名簿集め頼んでくる」

「なんだよフジヤマ、おっそいじゃん。なんでこんな遅く……」

部屋でひとり、勉強机のいすに座っていた拓登は、びっくりして言葉をつまらせた。まさか高が全身ずぶ濡れで、しかも中条といっしょに現れるとは思わなかったのだろう。

このまま黙って待っていたら、拓登の質問攻めにあうのはまちがいない。それに答えている時間はないので、高はすかさずおじいさんが作ったビラを取り出した。お母さんに見せようと1枚だけもらっておいたのだ。

「頼みがある。急ぎなんだ。これ！」

「……えーと、なにに、『土石流』？」

高からビラを受け取った拓登は、あっという間にそれを読み終わった。

「これホントかよ！？ 『陽光台2丁目5番地1～3』って、これ、うちも入ってんじゃない」

「うん。それで、拓登に連絡網を集めて欲しいと思って」

「へ？ 連絡網？ 学校の？」

「うん。できれば小1から中3のまで欲しい。全部集めればけっこう、陽光台の家の電話番号分かんと思うんだ」

「そんなの、なんに使うんだよ」

「今、消防団の人たちが、この『避難してください』ってところの家を回って呼びかけてる。でも本当は、それ以外の家の人にも、あぶないって電話したいんだって。でも、番号が分かんないから電話できないんだ」

「シャクシヨに頼めばいいじゃん」

「えーと、今、中川があぶないからって、そっちでみんな大変で、それどころじゃないって」

「はーん」

ほおづえをつくようなポーズで、拓登はしばらく黙り込んだ。となりから、中条が疑わしそうな目でこちらを見ている。中条は、拓登がこんな頼みを聞くやつだとは思っていないのだ。

「消防団も人が足りなくて、ここに書いてあるところに呼びかけるのがせいっぱいだって」

そこまでは言っていなかったと思ったけれど、高は話をちよっとおおげさにした。

「けど、この範囲の外は大丈夫なんだろう？」

「違う。この範囲は『絶対に避難しないとあぶない』とこで、この外でも、えーと、1階は安全じゃないって……」

「1階には泥が入るかもしれない。体悪い人が床に寝てたりしたらあぶないし、畳や家具を2階に上げておかないとダメになる」

聞きかじっただけの話を必死でくりかえしていた高の横から、中条が説明してくれた。

「拓登、もう時間がない」

「けどこれ、『起こるかもしれない』ってだけだろ」

「絶対起こるよ!!」

どうやら、高はものすごい顔をして叫んだらしく、拓登はびっくりしたようだった。

「……なんで分かるんだよ」

「だっておじいさんが言ったんだ。このまま誰も逃げなかったら、今夜12時にまた人がのまれるって! もう時間がないんだ!!」

拓登は目を閉じて、わざとらしくため息をついた。これはもうあきらめて、早く鳥居のおばあさんのところへ行った方がいいのかもしれない――

「……つまりアレか。『陽光台・電話でじゅうたんばくげきプロジェクト』」

「……『じゅうたんばくげき』!? えーと、あの、『ばくげき』とかじゃなくて、陽光台の人みんなに早く電話しないと」

「だ〜か〜らあ、『電話でじゅうたんばくげき』ってのがそういう

意味なの。これだから物知らないやつは困るんだよな。つまりこう
だろ。まずは他の学年に兄弟がいるやつらに連絡して、連絡網をフ
ァックスしてもらう。全部集まったら、陽光台の家にかたっぱしか
ら電話して、その『1階はあぶない』って話を伝える。オーケー？」
「え？ いや、電話番号分かったら、電話はきつと消防団の人たち
が……」

「さっき、人手ないつつったの誰だ？」

「あっ……そっか……」

たしかにそうだ。みんなもう、避難の呼びかけに出てしまってい
るだろう。

「けど神山、おまえ、いったいどこで電話するつもりだ？」

急に中条が話に割り込んできた。

この雨の中で待たせるわけにもいかず、落合の子である中条を連
れてきてしまったものの、拓登がどんな態度を取るのか心配だった
高はちよつと身がまえた。が、拓登の様子は、高と話している時と
変わらなかった。

「そりゃ、うちにファックス送ってもらって、うちから電話するに
決まってんじゃない」

「……ここも避難範囲の中だろ。電話なんかしてないで、早く避難
しないとあぶないぞ」

結局、連絡網が集まったら、中条のおじいさんがいるスーパーサ
ンシャイン（SS）の駐車場へ行き、それぞれの携帯で電話をかけ
ていくことに決まった。おじいさんがいれば、なにか分からないこ
とがあったら聞けるし、もし「大人を出せ！」と言われても、電話
をかわってもらえるから安心だということになったのだ。

連絡網は、『陽光台組』に頼む分は拓登の家にファックスで送っ
てもらい、中条が落合の子たちに頼む分は、直接スーパーSSの駐
車場に持ってきてもらうことになった。

「……あっ!!」

連絡網を送ってくれるよう頼むため、同じ『陽光台組』の塩野に電話しようとした高は青くなった。山道で呼び出し音を切ったまま忘れていた携帯電話に、5件ほど着信が入っているのだ。お母さんに連絡するのをすっかり忘れていた。

びくびくしながら家に電話をかけると、案の定、お母さんの声がひっくり返っている。

「タカシ!? ちょっと、今どこにいるの!? こんな時間までなにやってたの!! 拓登くんのおうちへ電話しても行ってないっていうし、消防の人たちが避難してくれって来るし」

「えっ、うちも?」

「川に近いから念のためって。アンタいったいどこにいるの。さっさと帰ってらっしゃい!!」

「……僕、ちょっと用があるから、これから集会所へ行ってくる。ひとりじゃあぶないから、お母さんは、おとなりの青柳さんといっしょに行ってよ。ひとりじゃ絶対ダメだよ。それじゃ、集会所でね。お父さんにはメールして、家はあぶないって伝えて」

「ちよっと高、アンタ、なに勝手なこと言って……」

電話を切った。ついでに電源も切った。見ると、中条が電話を終えてこちらを見ている。そうだ、早く鳥居のおばあさんのところへ行かなきゃいけないんだった。

「連絡網、頼めたか?」

「アキラに頼んだ。富士見野はこれからどうする?」

『アキラ』が広瀬のことだと気づくまで、少し時間がかかった。いくら中条に言われたからって、あいつが陽光台のことで動いてくれるのだろうか。

「早く鳥居のおばあさんのところ行かなきゃ。中条には寄り道させて待たせちゃったし」

「……いいのか？」

「いいよ。どうせ『これから集会所へ行く』って言っちゃったし。早く行こう」

足を入れるのが嫌なくらい濡れたスニーカーをはいていると、拓登が携帯電話を顔に当てたまま飛んできた。

「あー、ちよっと待て。すぐ済む。……おいフジヤマ、おまえらいつたいてどこ行くんだよ!？」

「中条の知り合いのおばあさんを、避難所まで送っていく」

「なに？ 別件？ それじゃ電話連絡班はオレひとりかよ!？」

「ごめん。終わったらすぐ行く。あつ、塩野に電話してない! そっちも後で頼む」

「なんだよ、人にごちゃごちゃ頼んどいて勝手なやつだな。しょうがない。ファックス集まったら、オレひとりで行く」

「えっ？ 今ひとりで歩くのはあぶないから絶対ダメ。あと川ぞいの道はダメだって。春日呼んでいっしょに行けないか？」

「あつ、そりゃいいや。どうせ電話かけんのに人いるもんな。国道んとこのマンションに住んでるやつらにも招集かけよう。そんじゃフジヤマ、後でな」

「ありがとう拓登。気をつけて」

「……神山、お母さんに避難のこと早く言っとけよ。このビラ渡しとくから」

「あ~~~~!! あんま1度にゴチャゴチャ言われっと思えるだろ!!! 分かった。ママに知らせる、残りふたりに電話、春日呼び出す!!! おまえらはさっさと行ってこい!!!」

拓登に追い出されるようにして、高たちは家を出た。

雨で見通しがきかない道を歩いていると、中条が話しかけてきた。
「マンホールよけて歩けよ。こういうときは、水でフタが浮いてハマることがあるらしいぞ」

「おまえ、なんかくわしいよな。それ、全部おじいさんが？」

「ああ。ちよっとひどい雨が降ると、いつも同じこと言う。水がひざの高さまできたら歩くのはあぶないんだとかさ。うるさい」

「本当にくわしいんだな」

「黒川の山津波とか中川のはんらんとか、いろんな目にあっただって
いうから、それでだろ」

「『山津波』？」

「ああ、じいさんはよくそう言う。今は土石流って言うらしいけど
な」

「そうだ！ 『土石流』って、いったいなんだ！？」

あわてていたからすっかり忘れていた。さっきおじいさんが『竜』
とすりかえてしまった『土石流』とは、いったいなんなのか。

「なについて、おまえ、知らなかったのか？」

「なんか聞いたことぐらいはあるけど……」

「山から泥が流れてくるんだよ。川とかを、すごい量が、すごい勢
いでドバーツと。山の大きな岩や木なんかも泥に乗って流れてくる
らしい。それが家や人を押し流すんだってさ。泥にのまれたり、流
れてきた岩や木に当たって、人が死ぬんだって」

やっぱり、それは竜とは全然違うような気がする。本当に、土石
流じゃなくて竜に備えなくていいんだろうか。

でもよくよく考えると、竜に備えるにはどうすればいいかなんて

分らない。避難するとしても、竜ならやっぱり空も飛ぶだろう。それじゃ陽光台全体どころか、城江市に住んでいる人みんなが避難しなくちゃならない。いくらなんでもそんなの無理だ。それなら、まだなんとかなりそうな『土石流からの避難』だけでもやっておいた方がマシだ。そう思いたい。

そんなことを考えているうちに、畑のところの交差点に着いた。小さな平屋の家の玄関先で、小柄なおばあさんが手を振っていた。

「わざわざありがとうね孝平ちゃん。でも本当に心配したわ。おじいさんは『10分ごろにはスーパ―を出た』っていうのに、45分になっても来ないし……」

出してもらったタオルで体をふきながら、中条はおばあさんにあやまった。

「ごめん、ばあちゃん。ちょっと寄るところあって。じいちゃんから電話あったの？」

「ええ。たしか20分くらい前。避難の準備はできたか、孝平は着いたかって。さ、遅くなると大変だから、もう出ましょう」

「もう大丈夫？ 荷物は？」

「これだけ。もう、本当になくなったら困るものだけしか入れなかった」

そう言っておばあさんは、手にさげていた古いリュックサックを持ち上げて見せた。ランドセルより少し大きいぐらいだ。

「こんなちよつとで、いいの？」

「いいの。孝平ちゃんたちが来てくれただけで十分。ええと、あなたは何ってお名前？」

おばあさんに優しくほほえみかけられて、高はちよつととまどった。みんなが必死で走り回っているときに、ここだけなんだか別世界みたいだ。

「富士見野高です。4月にここへ引っ越してきました」

「あら、ここの団地に？ こんなときじゃなかったら、ぜひうちに

お招きするところ인데、もうこの家にお客さんを呼ぶことはなさそうね」

「ばあちゃん！」

「分かるの。ここはあぶない。早く出ましょう」

「……荷物持つよ。ほら、手貸して」

「あら、ありがとう」

中条はおばあさんの荷物を背負うと、片手に傘を持ち、反対の腕をおばあさんと組むようにして、雨の降りしきる道へ歩き出した。

そのふたりの後ろについて歩いていると、なんだか『ただの役立たず』みたいな気がしてきた。高はちよつと緊張しながら、おばあさんが傘を持っている側の腕と腕を組んでみた。

「こっちは僕が……」

「まあ、うれしい。こんな素敵な男の人ふたりにエスコートされるなんて、長生きしてみようものねえ」

おばあさんが本当にうれしそうに笑ったので、だいぶ肩の力が抜けた。小柄なおばあさんを支えるように、その足取りに合わせてゆっくり歩く。

「富士見野、そっち、ドブにはまるなよ」

「この辺の道にはドブないよ」

広い道にはすでに水が流れている。きつと、こういうときに足をすべらせるのがあぶないのだろう。

黙って歩き続ける高たち3人を、激しい雨の音が包んでいた。

「タカシ！！ あんた、いったいどこ行ってたの！！」

小さな2階建ての集会所に着くなり、お母さんが目をつり上げてすっ飛んできた。

「お母さん、大丈夫？ 良かった。いつ着いたの？」

「今さっきよ。こんなときに車がないなんて最悪。で、こんな時間までどこ行ってたの！！」

2階の集会室には、すでに10人以上の人がいた。お母さんの大声に、部屋中の人はこちらを向いた。高は周りの視線が気になってしかたがなかったが、お母さんはまったく気にしない。いったいどう言い訳しようか悩んでいると、横から誰かが割り込んできた。

「高くんのお母さんですか？ 私、鳥居と申します。初めまして。」

こんな年寄りひとりではあぶないだろうって、高くんがこちらまで送って下さったんですよ。本当に助かりました。どうもありがとうございます」

「え、いえ、はあ、そんな、どういたしまして……」

鳥居のおばあさんの笑顔に調子を狂わされたらしく、お母さんはしどろもどろになったが、それでも横目でキッと高をにらむことは忘れなかった。その顔には『大事なお母さんをほったらかしにして、こんなおばあさんにつきそってたなんて！！』と書いてあった。

「なんでも、黒川があぶなそうだって前ぶれを、高くんが見つけられたそうなんですよ。それを消防団にちゃんと伝えてくれて……」

「まさか……」

「そうしましたら、こちらの消防団は落合の人間ばかりで、あちらの団地の中のことにはうといものですから、話を聞かせて欲しいいっ

て強引に引きとめてしまったらしくて。ご心配をおかけしてしまつて、本当に申し訳ないですわ」

「いえ、そんな……」

どうやら鳥居のおばあさんは、中条のおじいさんから高の話も聞いていたらしい。

どこから持ってきたのか、中条がかわいたタオルを渡してくれた。ありがたく受け取ると、腕と髪、そしてしぼった方が良さそうならい濡れているジーンズのすそをふいた。疲れていた。このままここで、お母さんといっしょに休みたかったが、それはできない。強引に仕事を押しつけてしまった拓登を放ってはおけない。

鳥居のおばあさんと話し続けていたお母さんに声をかけた。

「……お母さん、僕、ちょっとスーパーSSに行ってくる。また電話する」

「え？ ちょっと、アンタなに言ってるの！？ タカシ、戻ってらっしゃい！！」

言い終わるなり集会所の階段をかけ下りた。あわてて傘をひつつかむと集会所から飛び出す。こうなったら、国道に出て駐車場まで突っ走るしかない。電話が鳴り出したので電源を切ってしまった。誰からの電話かなんて、見なくても分かる。

と、自分の足音と雨音に混じってかすかに呼び声が聞こえた。お母さんの声ではない。

「こんなときに走んなよ富士見野。あぶないだろ」

「だってここであつたらマズいし……」

「お母さんと話してたと思ったら、急に飛び出すんだからな。こっちの身にもなれよ」

「ごめん。中条が来ると思ってた」

急に全力で走ったせいで息を切らしている中条は、そう言われてちよつとしぶい顔をした。

「おまえには鳥居のばあちゃんのところへつき合ってもらったんだし、神山にはいろいろ頼んだんだし、行くに決まってるんだろ」

「……けど、あぶないのは陽光台なんだし……」

そこまで言いかけて、高は足音が増えていることに気づいた。振り返って見ると、そこにいたのは同じクラスの若槻だった。必死で追いかけてきたらしく、肩で息をしている。男にしては長めのくせっ毛から雨が流れ落ちている。

「……ごめん。邪魔だったら、帰るけど、集会所で、中条くんに、話、聞いて、なんか、手伝えること、あるかなと、思ってた……」

理科で同じ班だったので、若槻のことは知っていた。おとなしい、ちよっとおどおどした感じの少年である。まじめなのに成績はあまり良くない。班では、落合の子は若槻ひとりだったので、ちよっと意地の悪い宮田や、気の強い女の子の松尾たちが、よくからかったりいじめたりしていた。高はそんな弱いものいじめは嫌だったが、『陽光台の子は落合の子と仲良くしてはいけない』という雰囲気におされて、止めることができずにいた。

いつも嫌な思いをしているんだから、こんなときには「陽光台なんてぶっつぶれちゃえ!!」と喜びそうなものだ。それなのに、わざわざこのひどい雨の中を「手伝えることがあれば」とついてくる。底抜けにいいやつなのかなんなのか、よく分からない。

「……うん、人足りないから歓迎」

「本当!？」

おどおどしていた顔がぱっとかがやいた。これでは、なんだか遊びにさそったみたいだ。

「……なんで集会所に来てたんだ？」

「うち、落合でも低いところにあるから、川があふれるとすぐ家に水が入るんだ。今日も中川の水が増えて、おばあちゃんが怖いっていうから、いっしょに行ってた」

「そうだよな。中川があぶなくなったら、落合からも避難するよな。あんな小さい集会所じゃ、人、すぐ入り切らなくなるぞ……」

中条は、なんだかおじいさんが言いそうなことをぼやいている。

「なんで小学校にしないんだろう、避難所。よくニュースで出てる

よな。『避難所となっているナントカ小学校では……』って」

「落合小は場所が悪いんだ。せまい道と河原はさんですぐ中川だし、横は黒川だし、土地は低いし。水が出たら校舎が島みたいになる。だから避難所にはならない」

「そっか……」

雨でにじんだ明かりの列が、国道ぞいに点々と続いている。その列の間に、スーパーの明るい大看板が見えてきた。

ところが、スーパーの1階にある駐車場に着いてみると、そこにはまったく人影がなかった。周囲に壁がなく、柱で囲まれているだけの駐車場は、大きな水たまりだらけになっている。

「拓登のやつ、お母さんに止められて、来れなかったのかな」

「でも、じいちゃんまでいないのはおかしい」

中条と顔を見合わせていると、少し離れたところにいた若槻に呼ばれた。

「中条くん、富士見野くん、これ見て!!」

行ってみると、駐車場の真ん中にある柱に、数枚はり合わされたスーパーのチラシが巻かれている。そこにはマジックで、でかかところ書いてあった。

『落合消防団前線基地、スーパーSS従業員室（2階）に移動!!』

従業員室の前に立っても、中からおじいさんや拓登の声は聞こえてこなかった。ドアは閉まっていて、『関係者以外立ち入り禁止』のプレートがはられている。

高がためらっていると、後から来た中条がさっとドアを開けた。広い部屋の中には、大きな机と折りたたみのいすがいくつか置かれていた。机の端には地図がはってあり、点々と色がぬられている。その地図に向かって、国道ぞいのマンションに住んでいる山本や今宮、落合の石渡たちが座り、それぞれ自分の携帯で電話をかけている。その後ろで立ち話をしていた拓登たちは、高たちに気づいてなぜかびくつとした。

「……拓登、いったいどうなってるんだ？」

「ああ、フジヤマか。ビックリさせんなよ。じいさんがもう帰ってきたかと思ったじゃねーか」

言われてもう1度部屋の中を見わたす。中条のおじいさんの姿がない。

「えっ、中条のおじいさんは？」

「さっき、お年寄りの避難を手伝ってくるって出られた。寝たきりの人なんだけど重くって、今そのおうちに行ってる2人だけじゃ、車に運ぶのが大変そうなんだって」

拓登に呼び出されたらしい会田が説明してくれた。改めて数えてみると、部屋には陽光台と落合の子を合わせて8人、高たちを入れれば11人もの5年生が集まっている。

拓登たちはやけにドアの方を気にしてあせっている。なにかたくらんでいるようだ。

と、そこへ広瀬が部屋に入ってきた。無言のまま、持ってきた紙のたばで拓登の腕をばしと殴る。が、拓登はけろっとしてそれを受け取った。

「おっ、コピー来た。サンキュ！ よっし、これで準備オーケー！」
広瀬が持ってきたのは、どうやら、おじいさんが作っていたビラのコピーらしい。

「拓登、おじいさんが帰ってきたら、なんかマズいのか？」

「マズいマズい。じいさん、オレが『このビラ、じかに渡してきたいよな』つつただけで、すごい声で怒るんだぜ。みんなで配りに出るなんつったら絶対止められる」

「あたりまえだろ！ おまえら、なに言ってんだ。おれたちは電話かけるだけのはずだろ」

その場にはいないおじいさんの代わりに中条が怒った。が、拓登たちはひるまなかった。

「そうだよ。連絡網集めも電話もうまくいったんだぜ。連絡網は全学年の集めて、みんな得手分けして電話して。ホラ、あの地図見ろよ。赤く色ぬってあんのが電話できた家」

拓登が得意げな顔をした。地図を見ると、おじいさんが引いた線の外側に、点々と赤い四角が散らばっている。

「すごい！」

「だろ？ けどさ、今宮や会田が、連絡網で電話番号分かった家を先にチェックしてたら、これ、全然足りないわけ」

「……足りない？」

「学校の連絡網じゃ電話番号分かんねー家が多すぎるんだよ。消防団が回ってるところ入れなくなつて、4割ぐらいは分かんねーんだ」

たしかに、小中学生の子供がいない家だつて多いだろう。それに子供がいたとしても、私立の学校へ行っていたりしたら、この辺の学校の連絡網には出てこない。

「それに、避難しなさいって区域の近くで、けっこう分かんない家あって。このままじゃ、私たちがわざわざこんなことやってる意味

ないじゃない？　せつかくみんなでここまでがんばったのに！」

会田はあわてるあまり早口になっている。

「そうそう。どうせやるんだったら、『小学生お手柄！　みんなに危険を知らせて被害ゼロ！』ってどこまでやりたいじゃん。だから今、連絡先かんねー家に、このビラ渡して回ろうって計画ねってんだ。あ、フジヤマ、おまえも行くか？」

「絶対ダメだ！　今、子供だけで外出るなんて無茶だ！」

「じいさんのコピーみたいなこと言うなよ中条。フジヤマの話が正しけりゃ、土石流が来んのは12時なんだろう？　まだ8時にもなつてねーじゃん。どうせすぐそこなんだぞ？　みんなで手分けすりゃ30分もかんねーって」

「そんなことじゃない。土石流がまだ起きなかったって、もう外は暗いし雨もひどい。黒川があふれたりしたら道歩くのだってもつとあぶなくなる。大人でもあぶないのに、子供だけで出るなんて絶対あぶなすぎる」

高としては、みんなに危険を知らせようとがんばってきた拓登たちが、電話できない残りの家にも知らせに行きたいという気持ちは分かるような気がした。でも、中条やおじいさんが反対する気持ちも分かる。たしかに今の陽光台はあぶなそうだ。竜はまだ出なくても、黒川があふれて水が道路にどっと流れ出したりしたら……

「ジョン！！」

「どうしたフジヤマ？」

急に大声を出したので、部屋中の子がみんな驚いて高の方を見た。でもそれどころではない。黒川を下ってきた竜は、きっと川ぞいの家にいるジョンをのみこんでしまう！

「忘れてた！　ジョンを助けなきゃ！　あんな川の近くじゃ絶対あぶない。僕ちよつと行ってくる！」

「ちよつと待て富士見野。ジョンってなんだ？」

「犬。シェパードだよ。このスーパの裏んとこの家にいる」

「……ああ、ルーのことか」

「えっ？ 中条、知ってるの？」

「ああ、前、あの家に出前持ってたことあるから。名前はルードヴィツヒだって」

「『ルードヴィツヒ』！？ あれが『ルードヴィツヒ』って顔かよ。誰にでもしつぽふって吠えないから番犬にならないって、家の人がグチってるらしいじゃん、あのバカ犬」

その話は高もお母さんから聞いたことがあった。家の人は怖い番犬が欲しかったので、ひとなつっこすぎて番犬にならないジョンは、役立たずとして邪魔者あつかいされているのだという。でも本当の名前を聞いたのは初めてだった。高は名前が分からないので勝手に『ジョン』と呼んでいたのだ。

「けど、このスーパ―の裏だったら、山からはだいぶ遠いし、家の中にいれば大丈夫じゃない？」

「ジョンはいつも庭にいるんだ」

「今日はおぶないから、家に入れてくれるんじゃないかな？」

「いや、あの家は無理だろ。共働きでふたりともいつも帰りが遅いんだって、うちのママ言ってた。ほら、地図見ろよ。やっぱ電話番号分かってねーじゃん。フジヤマ、そんな心配だったら今のうちにここ連れて来とけよ」

「僕、行ってくる！」

飛び出しかけたところを、高は中条に止められた。

「落ちつけよ富士見野。そんなかつこうでなにも持たずに行つてどうするんだ。いったいどうやって連れてくるつもりなんだよ。ここでちゃんと用意してからしろ」

「おっ、フジヤマがああの家まで行ってきていいんだったら、オレたちがあの辺の家にこのビラ渡してきたっていいよな？ よーし、行こうぜみんな！」

「ちよっ、待てって！ おまえらもちちゃんと用意してから！」

しぶしぶ折れた中条は、ジョン救出とビラ配り作戦の計画を立てると、注意することをみんなに話しはじめた。ひとりで歩くのはあぶないので3人1組のチームで、流されないようしっかり手をつないで行くこと。小柄な子は特にあぶないので、黒川からいちばん離れた2丁目西側の担当にする。連絡できていない家全部を回れていなくても、8時30分には絶対ここへ戻ることに。車と足元に気をつけて、川ぞい山ぞいには絶対近づかないこと。もし停電したら即戻ること。

「あと人にも気をつけないとな。じいさんたちに見つかったらアウトだし」

「……じいちゃんたちに見つかったって、あぶないことはないんだぞ神山。じゃ、チーム分け決める。各チームのリーダーは、町にくわしい陽光台のやつがやる。ルーがいる2丁目の川側は富士見野がリーダー。西側は神山。川向こうの1丁目は春日な。あとは……」

「中条、このままフジャマちゃんと組むの？ だったら私も2丁目川側チームに入れて。ふたりとも体大きいから、もし足すべらせても止めてもらえそうだし」

「なに言ってるんだ会田！ おまえ、まさか行く気かよ！？」

「あたりまえじゃない」

中条が珍しく大声を出したが、会田はまったく動じなかった。

「絶対ダメだ！ 男子でもあぶないって話してんのに、女子が行けるはずないだろ」

「なによ女子女子って。言っとくけどね中条、私、拓登くんたちより大きいんだし、ずっと体力あるんだから。ここ来る前はずっとサッカーやってて体きたえてたんだし、その辺の男子には絶対負けな自信ある。だから行く」

「そういう問題じゃない！ だいたいおまえ、そんなかつこうで今、外歩けるわけないだろ！？」

高が見たこともないほどキツイ顔をした会田は、自分の長いフレ

アースカートをちらつと見やり、次に中条をにらむとこう言った。

「こうすればいいじゃない」

次の瞬間、部屋中の人間があつと息をのんだ。なんと会田は長いスカートを自分でバツとたくし上げると、腰の横できゅつと結んでしまったのだ。中条も、これにはさすがに言葉を失った。

と、それまで電話をかけていたはずの山本が、会田のとなりへ来て声をかけた。

「……桜子ちゃん、私のこのジーンズとスニーカー貸してあげるから、早く着がえよう」

「えっ、いいの美里？ それじゃ借して。じゃ、すぐ着がえるから待っててよ!!」

くぎをさすように一同をきつと見すえてから、会田は山本といっしよに、となりの更衣室に入っていた。

「……会田こええ」

拓登がぼそつとつぶやいた言葉に、部屋中の人間が黙って深々とうなずいた。あの迫力にはとてもかなわない。

結局、グループとそれぞれの担当地区は、こう決まった。

・ 陽光台2丁目西側 神山、広瀬、若槻

・ 陽光台2丁目川側 富士見野、会田、中条

・ 陽光台1丁目 春日、宮田、木島

・ 電話連絡班 石渡、今宮、山本

スーパードでビニールと安いレインコートを買うと、そのビニールでビラを包み、みんなでレインコートを着た。その間に、スーパードの上のマンションに住んでいる山本が急いで家へ戻り、犬のリードと、各グループがそれぞれ持つにはひとつ足りなかった懐中電灯を取ってきて貸してくれた。山本の家では犬と猫を飼っているのだという。

「うちの犬、小さいから、このリード、シェパードには細すぎるかもしれないけど。気をつけてね」

「ジョンは大人しいから大丈夫だと思う。ありがとう」

「富士見野、今のうちに、ルーを避難させたこと知らせる張り紙書いてけよ。向こうじゃ絶対書けないぞ」

「今書いてる！」

「みんな、地図のコピー持った？ 黄色いところが連絡できてない家ね。ビラと懐中電灯は？ じゃ、気をつけて！ 30分には終わるね！！」

着がえ終わった会田が、色分けした地図のコピーを配っている。山本がはいっていたジーンズとスニーカーをはき、長い髪を後ろでたばねたその姿は、昼間に学校で見た会田とはまるで別人だった。『それまで見たことがないような女の子』が、堀川で親しかった女の子たちと同じになってしまった気がして、高はちよつとショックだった。

「おい、ついに大雨洪水警報出たぞ！ 『城江市陽光台の一部に避難勧告』だってよ！ 早くしないとマジであぶないぞ！！」

危険を知らせる電話をかけながら、部屋のテレビでしっかりニュースをチェックしていたらしい石渡が、机の向こう側から叫んでいる。

「分かってるよ！！」

9人はそれぞれチームに分かれると、あわただしく部屋を飛び出した。

高たちのグループは、最初にジョンの家へ向かった。

最初にジョンを連れ出すと、その後ずっと連れて歩かなければならないので、最後にしようと中条たちには言われた。でも、どうしても最初に行きたいと高が頼み込んだのだ。後で行くことにして、時間がなくなったり、おじいさんに見つかったりしたら、ジョンを助けられなくなってしまう。それはどうしても嫌だった。

やっぱり家の人は帰っていないらしく、家には明かりがついていなかった。インターホンを押しても、誰も出ない。人の代わりにジョンが、のっそりと大きな犬小屋から出てきた。

「うわあ、陽光台にこんな大きな犬いたんだ。知らなかった……」

門のとびらにカギがかかっていたらどうしよう。不安になりながら懐中電灯の光を当ててみると、金属格子のとびらには内側からかんぬきがかかっているだけだった。これならなんとか開けられそうだ。高は格子の間に指を入れ、少しずつかんぬきをずらしてとびらを開けた

「ジョン、ちよつと入るぞ」

「おい、急に入るとあぶないぞ富士見野！」

中条が止めるのを無視して庭へ入った。勝手に『テリトリー』に入ると怒る犬がいることは知っていたけれど、入らないとジョンを助けられない。

「ワンッ！」

ジョンは大きな声で吠えたと、すごい勢いで高の方へ向かってきた。門の外で会田が悲鳴を上げたのが聞こえた。でも高は逃げなかった。ジョンは僕の友達なんだ。僕はジョンの味方だ。怖くなんか

ない。

向かってきたジョンはそのまま高に飛びつくと、顔をべろべろなめだした。ジョンは甘えているのだが、高にすれば強くつきとばされたような感じで、後ろにたおれないようふんばるのが大変だった。「早くリードつないで！」

山本に借りたリードをポケットから取り出すと、ジョンはおとなしくなった。でもしっぽをぶんぶん振ってうれしそうだ。散歩に連れていってもらえると思っているらしい。

太い首輪に細いリードをつなぐと、ジョンはゆっくり歩き出した。通りへ出ると、入れかわりに中条が庭へ入り、さつき高が書いた紙を家のドアにはってきてくれた。

『土石流があぶないので、ルードヴィツヒはひなんさせています。明日にはかならず返しにきます。陽光台2丁目4・2 富士見野』

それから高たちはジョンを連れ、消防団の人たちに見つからないよう気をつけながら、電話できていない家を順番にたずねて回った。玄関先まで行って家の人にビラを渡して説明する役は、3人が順番でやることにした。トップバッターは中条に決まり、高は会田とふたり、家の門を入れてすぐのところでは中条の説明が終わるのを待った。

「犬、怖いのか？」

さっきの悲鳴が耳に残っている。ジョンは大人しくしているけれど、もし犬が嫌いだとしたら、こんなに近くにるのは嫌かもしれない。

「さつきはびっくりしただけ。すっごい大きな犬がフジヤマくんに向かってきたから。犬は好き。小さい犬だったら」

ちよっと恥ずかしそうな顔で高とジョンを見た会田は、それからまた、家の人に説明をつづけている中条の方に向き直った。

「……がっかりさせちゃった？」

傘に当たる雨音がすごいのだが、会田の声はその中でもよく通った。

「……なにが？」

「私が美里の服に着がえて戻ってきたら、フジヤマくん、すごいがっかりして見えたから。もしかして私が、女の子っぽくするの、やめちゃったから？」

大当たりだ。どうやら思いっきり顔に出ていたらしい。

「……びっくりした」

「ゴメンね。もう猫かぶるの疲れちゃってさ」

また高の方を見ると、大雨に似合わないさわやかな顔で笑った。それはそれでちよつとかわいかった。

「……なんで猫なんてかぶってたんだよ」

見抜かれていたのが恥ずかしかったので、高はついぶつきらぼうな言い方をした。でも会田はちっとも気にしなかった。

「あゝ、あのね。私、湊に住んでただけど、ずっとサッカーやって男の子たちと遊び回ってたんだ。そしたら、引越すことになったらママが言うわけ。『陽光台へ行ったらちよつとぐらい女の子らしくしてちようだいね』」

「それで……」

「ううん。ママのお説教なら聞かない。でもパパまで『パパも、女の子らしい桜子が見たいなあ……』なんて言うから、パパのためならちよつとがんばってみてもいいかなと思って。でもやっぱりダメ！ サッカーやらないで家庭科部なんて、もう、おかしくなっちゃう」

「……会田、家庭科ダメだもん……」

戻ってきた中条が、後ろでぼそつとつぶやいた。

「うるっさいなあ！！ アンタが得意すぎるだけじゃない。ムカつく！ 聞いてよフジヤマくん。クラブでさあ、私がお米とぐのに洗剤入れたって怒られてる後ろで中条のやつ、『いりこだけで、だ

いぶいいだしが取れた』な〜んてやってやがんのよ。この差はなによ！ もう、やる気なくすつての。次行こ！！」

もう、今の話について考えるのはよそうと高は思った。中条が真剣に『いりこだし』をとってる後ろでお米に洗剤入れて泡立てている会田なんて、想像したら大笑いしてしまいそうだ。今は忘れるしかない。

「……落合の消防団の代理で来ました。今晚、土石流が発生する危険があるそうです。大事なものは2階へ上げて、今晚は2階へ避難してください……」

今度は会田が説明担当である。知らない大人が出てきても平気でちゃんと説明できるあたり、中条も会田もけっこうすごい。

「富士見野」

大人っぽい顔で話している会田を見守りながら、中条が話しかけてきた。

「考えたんだけど、おまえ、野球やりたいんだったら、自分でメンバー集めたらどうだ？」

てつきり会田の話かなと思ったら、全然違ったので高は驚いた。「集ままないよ。みんな嫌だって言うし、子供が少ないから無理だって先生も……」

「けど、やりたいんだろ？ 同じクラスにアキラだっていんのに、もったいないって」

「……え〜っと、広瀬がなに？」

なにが「もったいない」のか分からない。中条の方を見ると、目と目が合った。

「知らないか？ こっから中川渡ってずーっと先の方の関口に少年野球チームがあんの」

「関口ファルコンズ」

「それぞれ。あそこで野球やってた。みんなに『金子の次のエース』って言われてたって」

「ファルコンズの金子の次い!？」

城江の周辺では『ファルコンズの金子』といえば、すごいピツチャーとして有名だった。あの小柄な広瀬が、あの金子の『次のエース』あつかいされていたなんて。

「じゃ、今もあいつ、関口に？」

「いや、去年の秋にやめた。行くぞ」

説明を終えた会田がこちらへ歩いてくる。広瀬の話は気になったが、こんなときに長話はできない。高は、ずぶ濡れになりながら座っていたジョンをうながすと、ふたりといっしょにまた歩き出した。

「……なに? こんなときになんのいたずら？」

ドアを開けて出てきたお婆さんのこわい顔を見て、高はもう逃げ出したくなった。でも、中条も会田もちゃんとやっているのだ。ひとりだけできないなんてかつこ悪い。

「……これっ、しょっ……落合消防団からのお知らせです。僕たち、これを渡しに……」

「……………」

ビラを渡すと、それを見たお婆さんは静かになった。さすがにおじさんの字は、大人が書いたものだと一目で分かるからだろう。

「今晚12時ごろ、土石流が来ます。2階へ避難してください」

「……『12時』って、変な子ねえ……。これ、本物なの？」

なにしろ高の頭の中には『コヨイネノコクシヨウシ』『今夜12時ごろ』というあの警告がはりついている。思わず口に出してしまう。

「はい。中条のおじいさんに……ここに電話かけてくれたら、大人の方が教えてください。信じてください！」

「……まあ、市が避難勧告出したっていうし、いたずらじゃないのかしらね。それにしても、こんな子供を使うなんて、この辺の消防団ってどうなってるのよ。いいわ。ありがと。子供は早く家に帰るなさい」

ぐったり疲れて通りへ出ると、待っていた中条と会田が、同時に

ポンと肩をたたいてくれた。それで少し元気が出た。

「こんな日に、誰がこんなずぶ濡れになってまでいたずらするんだよ」

「『こんな子供』がやってんのが嫌なら自分がやればいいのに。なにより、感じ悪う」

中条がリードを持っていてくれたジョンが、高を見て『く〜ん』と鳴いた。ジョンまで元気づけてくれているようだった。

たずねた家の反応はまちまちだった。高が最初に説明したおばさんのような家もあれば、逆に「まあひどい。こんなに濡れて。ああ、外の子たちもひどいわ。みんなちよつと入んなさい。なにか体ふくもの出してあげる。なにか食べる？ ジュースはある？」と、親切すぎて断るのに苦労する家もあった。そして、留守なのか、まだ誰も住んでいないのか、インターホンを押しても誰も出てこない家も何軒があった。

「よし。これで私たちの仕事は終わり！ ちゃんと時間までに終わって良かった！」

最後の家から出てきた会田が、軽くガッツポーズしながら言う。

「おれたちの担当は、山側がだいぶ避難区域になってて、回る家の数少なかったからな」

「ひとが喜んでんのに水ささないで。ジョンだってちゃんと助けたんだし」

「早く戻ろう。なんか道が川みたいになってきた」

中条と会田が話している横で、高はその『山側の避難区域』の方を見ていた。おかしい。車が来ていないのを確認してから、十字路のまんなか立ってじっと見てみる。

「おい富士見野、なにやってんだ。戻るぞ」

「……中条、こっから向こうって、みんなもう避難してるんだよね？」

「ああ」

「じゃ、なんであの家、電気ついてるんだろう？」

中条と会田も、近づいてきて高が見ている方を見た。おそらく、

団地でいちばん山に近い通りに面した家のひとつだろう。手前の家々の間から明かりが見えている。

「……避難するとき、消し忘れて行ったんじゃないか？」

「なんか動いた！」

「まさか」

会田が指をさして騒ぎ出した。

「なんか見えた！　今、あの窓んとこ、なんか影みたいなのが動いた！」

「あんな遠くのもんが見えるかよ。見まちがいだろ」

「私、中条と違って目はいいの。絶対見た。誰かいる！！　フジヤマくん、行こ！」

言うなり会田は、傘を持っている高の腕をつかんで坂を登りはじめた。高はその家に行くことまでは考えていなかったので、急に引きずられてびっくりした。

「やめろよ。見まちがいだって」

「近くまで行かなきゃ、見まちがいかどうかなんて分かんないよ。あんなところで避難してなかったら本当にあぶないじゃん」

会田はなにがなんでも足を止めようとしなない。これは引き止められないとあきらめたらしい中条は黙ってついてきた。

明かりの消えた家ばかりがならんだ町は、雨の音がやけに大きく感じられて不気味だった。歩きたびに、道を流れている水がはねて足首に当たる。雨音に混じって、山の方からなにか低い音が聞こえてくるような気がする。時計を見た。もう9時近い。

「あれっ、あそこ、誰かいる！」

「アキラたちだ」

そこには、川から離れた2丁目の西側を回っていたはずの拓登たち3人が立っていた。明かりのついた2階の窓を見上げているところを見ると、高たちと同じように、窓の明かりに気づいて飛んできたらしい。

「拓登、なんでこんなところに？　担当は？」

「あつ、フジヤマたちも気がついたのか。広瀬のやつが、あんな山に近いとこの家に電気ついてるって言うからさあ、一応見に来たんだよ。あつ、バカ犬！」

「これがルードヴィツヒ？ 耳が折れててかわいいね」

若槻は平気でジョンをなでている。ジョンは人が多くてにぎやかなのがうれしそうだ。強い雨にもめげず、ぶんぶんしっぽをふって水をまきちらしている。

「それで、家の人はいた？」

「インターホン押しても出ない」

「じゃ、誰もいないの？」

「いる。さっきあそこの窓で、人の影みたいなのが動いてんの見た」

「人がいるんだったら、インターホンに出るだろ？」

6人が顔をつきあわせて大声で話し出す。雨の音が激しい上に、レインコートのフードが耳をおおっているので、大声を出さないとなかなか聞こえないのだ。

見ると、庭のガレージには車が1台入っている。門にはインターホンと郵便受けがふたつずつ付いていて、家の外に階段がついている。どうやら他の家とは違って、1階と2階は別の人の家らしい。「いや、そりゃ分かんねーぞ。オレのママの知り合いのおばさん、ひとり暮らしだけど、知り合いが来るとき以外はインターホン鳴っても出ないっつってた」

「なんでだよ」

「二つブいな中条。ホラ、いろいろあるじゃん。押し売りとかカンユーとかさ。そーゆーのがイヤだから、いつもは出ないんだって」

「……それに、聞こえない人もいるよ！」

若槻が必死で話に割り込んできた。

「ぼくのおじいちゃん、耳聞こえなくて、インターホン鳴らしてもダメなんだ。だから、おばあちゃんいないときには、おじいちゃんがいる、パパがカギ開けて入るんだ。ここの人もそうかもしれないな

いよ」

「あゝ、あり得る。陽光台は、金持ちのじーさんばーさんが、ローゴの住まいに買ったってところらしいし」

「つまり、家には誰かいて、インターホンには出ないのかもしれないってことか……」

会田がしめくくると、みんな黙り込んだ。どうしていいのか分からない。

「中条くんのおじいさんに電話しようよ」

「やめとけよ。じいさん今ごろ、オレたちが勝手に外出たってカンカンだぜ。今、電話なんかしたら『帰ってこい!』って怒られるだけじゃん」

と、そのとき、少し離れたところから声がした。

「……部屋のやつが出てきたら、大声で叫べ」

見ると、声の主は広瀬だった。さしていた傘を道路に置き、問題の窓を見ながら、じりじりと後ずさりしている。あれは、なにか投げる気だ。

「やめなよ広瀬くん。あぶないじゃん!!」

「そうだぞ。窓ガラス割れたりしたら、怒られるどころかケーサツ呼ばれっぞ。そんで『また子供がこんなハンザイを!』とか言われるんだぞ」

「ケーサツ来んならそれでいいだろ。家の人避難させてくれる」

全員が黙った。言われてみればその通りだ。

「……でも、ガラスが割れて、石やガラスが中の人に当たったりしたら……」

「端のギリギリねらう」

言いながら、広瀬は自分がどこから投げるべきか慎重に見定めている。すぐ近くから高いところをねらって投げるのは難しいので、少し距離を取って投げようということらしい。だが、そんなに離れたところから球、ではなく石は届くのか。

はらはらしながら広瀬の動きを見つめる高の後ろでは、相変わら

ずどこまで真剣なのかよく分からない拓登がみんなをしきっている。
「オレが『せーの』つつたら大声で叫ぶ！ 『しょーぼーだんでーす！』。オーケー？」

「……ぼくたち、消防団じゃないよね。そんなこと言っているのか……」

「いーのいーの。オトナはオトナの言うことしか聞かねえんだから。オレたちは中条のじいさんに頼まれた消防団の手伝いの。ほれ、じいさんの代理人もいる」

「おれは『代理人』じゃねえ」

場所を決めたらしい広瀬は、ぴたりと動きを止めた。もう家からはだいぶ離れている。レインコートのフードも外しているの、その髪から雨水が流れ落ちていく。風はそれほどなかったが、雨は、あたりが白っぽく見えるほど激しい。本当に大丈夫なのか。

すつと振りかぶる。その右手が後ろへ引かれたかと思うと、腕はそのまま円を描くようにするどく振り出された。次の瞬間、石は弾丸のように2階の窓を撃ち抜いていた。『パン！』というするどい音とともに、窓の、いちばん家の端に近いあたりに小さな穴が開いた。

「すげえ！！」

高は思わず歓声を上げた。広瀬はまったく表情を変えずに窓をにらんでいる。

「あんな高いところ正確にねらって、あんな強い球投げられるなんてすげえ！！」

「富士見野、しっ！！」

はしやぎすぎた高は中条にたしなめられてしまった。みんなが息をつめて窓を見上げている。あわてて窓を見れば、たしかに人影のようなものが映っている。その影がしだいに大きく、はつきりしてくる。広瀬が開けた穴の前で止まる。窓ガラスが動いた……

「せーのっ」

「しょーぼーだんでーす！！」

「うワンッ！」

練習もしていなかったのに、見事にみんなの声がそろった。窓から顔をのぞかせたおばあさんが、びっくりしたようにこちらを見下ろしていた。

坂井さんというそのおばあさんは、いつもは1階に住んでいるのだと話してくれた。避難勧告が出たことはテレビを見て知っていたけれど、だんなさんであるおじいさんの足が悪くて、とても遠くへは行けないと思い、息子さんたちのためにと作っておいた2階へ避難したのだという。消防団が来ていたことは知らなかった。消防団の人たちは、まだ明るいうちにここへ来て、インターホンに出ないこの家は留守だと思ったのだろう。

中条が、高の電話を借りておじいさんに連絡した。おじいさんのとなり声は、電話ごしでもみんなに聞こえるほど大きく、スーパーへ戻るのが怖くなるほどだった。そしておじいさんから連絡を受けた消防団の人たちが、ふたりを連れに来ることになった。

<11>

11

高たちは、避難のしたくをするおばあさんについて1階へ行き、玄関の靴ぬぎ場で濡れた体をふいた。レインコートを着て傘をさしていたのに、ほとんど役に立っていない。レインコートの内側は汗でびっしょりだ。借りたタオルでジョンの体もふかせてもらった。

「それで、オレたちこれからどうすんだ？」

「ここで消防団の人たちが来んの待ってって」

「車乗せてってもらえるのか？　けど、この人数じゃ全員は無理だよなあ……」

「車は来ない」

「えっ!？」

みんな驚いて中条を見た。当然、消防団の人たちは車で来ると思っていた。

「道路にもだいぶ水が流れてるから、もう車はあぶないって」

「じゃ、どうするわけ!？」

「……かつぐんだろいうな」

「じいさんたちが、じいさんをつぐのかよ……」

拓登のぼやきにみんな苦笑いした。なにしろ陽光台の方へ来た人たちは、現役消防団員ではなく『元団員』の人が多かったから、みんなそれぞれ立派な『おじいさん』だったのだ。

「なあ中条、2階にいるおじいさん、僕たちがこっちの玄関まで連れて来ておかないか？」

「やめてよフジヤマくん。拓登くんみたいにいい加減なこと言わないで。子供だけで大人運ぶなんて無理」

「けど、もう時間ないよ。手伝いに来るのだってどうせおじいさん

たちなんだし、ここからまた歩いていかなきゃいけないんだし。もう準備できてて、すぐ家出られるようになってた方が絶対いいよ」

「……ばあさんとふたりで2階行けたんだったら、孝平たちが手伝ったら、なんかなるだろ」

「ここでボケーっと待ってるよりやマシだな。よっし、フジヤマと中条と広瀬は『じいさん運び』班、オレたちは『ばあさん手伝い』班、決定。行くぞ！ あ、フジヤマ、バカ犬ちゃんをつないどけよ！」

拓登の言葉を合図に、みんなは外の階段と家の中へそれぞれ散っていった。高はジョンのリードを玄関の柱に結びつけると、あわて中条たちの後を追った。

消防団が着いたときには、もう9時近くになっていた。

高たちはインターホンが鳴ったのに気づいたが、おじいさんもおばあさんも気がつかないようだった。ふたりとも少し耳が遠くなっている上に、雨の音が激しいので、余計に聞こえづらくなっているらしい。

消防団の人たちは、ドアを開けるといっせいに驚いた顔をみせた。坂井のおじいさんとおばあさんは、そろって靴をはき、靴ぬぎ場に置かれたいすに座っている。荷物はふたつのバッグにまとまっている。こんなにすっかり準備をととのえているとは思わなかったのだろう。

「……私、落合消防団の須坂と申します。話は聞いているかと思いますが、こちらの地区は危険ですので、下のスーパースまでお連れします。よろしいですか」

「はい。よろしく願います」

それから須坂団長は、高たちの方に向き直った。

「まったく無茶をして。中条さんがカンカンだぞ。もう道路を流れる水が増えてあぶない。ゆっくりでいいから、足を取られないようしっかり歩くんだ。流れてくる枝にも気をつけろ」

そこまで言うとは、腰につけていた長いロープをほどいた。一方の端を自分のベルトに、一方の端を別の人のベルトにきつく結ぶ。ふたりがおじいさんを両側から抱えると、長いロープはちょうど輪のようになった。

「みんな、このロープの中に入って、2人ずつ手をつないで4列！空いてる側の手でロープを持て。傘はもう役に立たないから置いて行け。ロープはあてにしないで一步一步慎重に歩くんぞぞ！」

「うわー、こんな時に電車ごっこかよ」

「コンビどうする？」

「こらっ、ぐずぐずするな。行くぞ！！」

須坂団長ににらまれて、高たちはあわててロープの輪に入ると坂井さんの家を出た。ジョンのリードは、高たちの後ろで坂井のおばあさんを支えていく消防団の人が持ってくれた。

道路にはにごった水が流れていた。雨は、体に当たると痛いぐらい強く激しくなっている。まだ停電はしていないらしく、街灯が夜道を照らしていた。

「中条から聞いたんだけど、広瀬、なんでファルコンズやめちゃったんだ？」

高は、雨音と張り合うように大きな声で聞いた。

となりの広瀬は、むっとしたように押し黙っている。それはそうだろう。ふたりずつのコンビを決めるとき、いきなり親しくもない陽光台の子にがちり手を取られてしまったのだ。うれしいはずはない。

「あんだけ投げられんのに、もったいないよ」

「……うるっせえよ！」

それまで、まるで高の声が聞こえていないかのように真正面を見すえて歩いていた広瀬が、急にそうどなって、怖い顔で高をにらみつけてきた。

高はひとりっ子のせいか、人に敵意をぶつけられるのが苦手だっ

た。いつもだったら、もうおじけづいて黙ってしまったに違いない。が、しかし。今は絶対ここで引くわけにはいかない。さっきの見事なピッチングフォームが目には焼きついている。

「さっきからべらべらべら、てめえ、いったいなんなんだよ！」

1点差で負けている最終回、ツーアウトの後でツーストライクを取られたときのような緊張感だった。ここで終わりにしてたまるか。

「……キャッチャーだ！」

相手がひるんだのを見て、高はニヤツと笑ってみせた。かろうじてヒット。

「ファルコンズみたいなちゃんとしたチームじゃないけど、ずっと野球やってた。今でもすっげえ野球やりたいんだ。なあ、いっしょにやろう!!」

「おいこらフジヤマ、こんなときに、でかい声で広瀬くどいてんじやねーよ！」

声がした方を見ると、会田と組んで前を歩いていた拓登が、あきれたような顔をして振り返っている。

「なにっ? おい、野球バカに野球の話させんな!! 話に気いとられて事故る!」

さらに先頭を歩いていた中条にまでどなられてしまった。

「うそお、フジヤマくんって、野球バカだったの? 同じサッカー好きだって信じてたのに。だまされた!」

「富士見野くん、ぼく、やってみたい!」

会田や若槻までが、こちらを振り返って大声で話し出す。みんな立ち止まってしまった。

「シャーラップ!! 続きはSSに着いてから!! その野球バカ、着くまでもうしゃべんな!」

あの拓登にまともなことを言われてしまったはどうしようもない。高は黙って歩き出した。さすがに、つないだ手から気持ちを讀み取することはできなかった。

中条のおじいさんは、駐車場から2階へ上がる非常階段のおどりに立っていた。ものすごく怒っているのが遠くから見ても分かる。でも、今は駐車場が水びたしでエスカレーターが止まっているので、非常階段を使わないとスーパ―へ上がれない。

「ああ団長、みんな無事か？ 良かった良かった。ここまで来れば大丈夫です。ゆっくりゆっくり、気をつけて。……おいおまえら、なんて無茶しやがる！！」

腰のロープを外して先に上がった消防団の人たち、それから坂井さんたちに優しく声をかけたおじいさんは、高たちの前でがらっと話し方を変えた。時計を見ると、もう9時50分になっている。

「どういうつもりだ。絶対に外には出るなど言っただろう！ おまえら、そんな簡単な約束も守れんのか！！」

「すぐそこまで行っただけじゃん。あぶなくないようにちゃんと3人でコンビ組んで行っただけ。それに、オレたちが気がついたから坂井さんたち避難できたんだぞ。『被害者』減らせたんだし、ほめてもらっていいぐらいじゃん」

黙って立っている中条の後ろから拓登がぶつくさ文句を言った。

と、次の瞬間、おじいさんの怒りが爆発した。

「ふざけるな！！」

ものすごい迫力に、さすがの拓登もひるんだ。気の弱い若槻はもう半泣きになっている。

「なーにが『被害者を減らせた』だ。生意気言うんじゃない！ いか、人を助けに行っただけの人間が災害に巻き込まれりゃ、被害者減らすどころか増やしたことになるんだぞ。なにが『すぐそこ

まで』だ！　そう言って出かけて行って帰らなかった人がどのくらいいると思ってる。災害にあった人たちだって、みんな『ここは大丈夫』『まだ大丈夫』『自分は大丈夫』と思ってたんだ。それでもやられた。なんにも知りもしないで勝手に甘く見るんじゃない！」
そこまで一気にまくしたてると、おじいさんは汗をぬぐい、小さくためいきをついた。

「おれがどれだけ肝を冷やしたと思ってる。重いばあさん背負って車に乗せて、帰りついでに黒川の様子見に行ったら、その国道の橋を子供が歩いてっじゃねーか。よく見りゃお前らの友達だ」

どうやら1丁目へ向かった春日たちは、おじいさんに見つかったらしい。

「つい『なにやってる！』つつたら、あいつら、おれに気づいて逃げ出しやがった。もう橋げたに水がかかりそうなあぶねえ橋の上走りやがって。そしたら案の定、1人がつるっと足すべらせて……」

「流されたの!？」

「おっそろしいこと言うんじゃねえよ。前走ってたやつらが気づいて、ぱっと腕ひつつかんで引き止めた。本当にゾツとしたぜ。すべった勢いで、もし橋のらんかんの間から川に落ちたらどうなったと思う。絶対に助からねえぞ」

「あ、あんなすき間、体通んないから落ちないって」

「おまえらぐらいの大きさだったら、すべった勢いであんなすき間はつるつとすり抜けちまったりするんだ。そしたらあの川へドボンでおいまいだ」

もう誰もなにも言わなかった。もしかしたら本当にそうになっていたかもしれないのだ。怖かった。

「……ちつとは反省したか」

「ごめんなさい」

みんな素直に頭を下げた。

「よし。そんじゃ、お前からしり出せ、しり」

いきなり言われた若槻はぎょっとして後ずさった。が、おじいさ

んは遠慮なくその腕をつかむ。

「な、なにする気だよ」

拓登も相当たじろいでいる。

「無茶やらかしたばつだ。しりたたき！」

言いながらぱーんと若槻のおしりをひっぱたいた。

「次、おまえ！」

逃がす間もなく今度は拓登をつかまえる。

「なにすんだよ！ 児童ギャクタイだ！ ボーリヨク反対！ ぎやっ！」

文句を言うひまも与えずひっぱたく。なにしろ階段のおどり場はせまかったから、怖くても逃げ場がない。おじいさんは次々にみんなをつかまえてはおしりをぶっていく。当然、高も見逃してはもらえなかった。

「高くん、あれほど外出歩くのはあぶないと言っただろうが！」

ぱーん！ 音は大きかったし、びっくりしたが、それほど痛いとは思わなかった。

「次、おまえ！ しり出せ、しり！」

「おいっ、まさか女の子までぶつ気かよ。それもおしり出せって、それ思いつきりセクハラじゃん！」

「なにバカ言ってやがる。人の体でいちばん肉が厚くて、ぶたれてもあぶなくねえ場所がしりなんだ！ そんなことも知らんのかおまえ」

ぶたれたおしりをさすっていた拓登が驚いて大声で騒いだ。が、当の会田はおじいさんを前にしても平然としていた。

「私もいっしょに行ったもん。いっしょに悪いことしたんだからいっしょにしかられるのが当然よ」

「よく言っただ！」

ぱーん！ おじいさんは他の子とまったく同じように会田のおしりをひっぱたいた。

「いったあゝ」と言いながら立ち上がった会田は、なんだかさっぱ

りした顔をしていた。

そして最後に、おじいさんは中条の前に立った。おじいさんはそれまでのように『しりを出せ!』とは言わなかった。黙っておじいさんを見ている中条をしばらくにらみつけた後、こぶしを振り上げた。

『ゴッ!』

横にいた高の方が『いてっ!』と言いたくなるような音がした。

中条は黙ったまま、殴られた頭をさすっている。

「それじゃおまえら、さっさと上にあがって……」

「おじいさん、僕も殴ってください!」

高はおじいさん呼び止めて頭をさし出した。みんながぎょっとしているのが分かる。横から中条の、『やめとけよ富士見野』という声が聞こえる。でも、やっぱりこれはおかしい。

「中条は……じゃない、ええと、こ、孝平くんは、ずっとみんなを止めようとしてました。それなのに、僕たちがどうしても行くっていうから、ついてきてくれたんです。僕はジョンが助けたくて、どうしても行きたいって頼みました。だから中条だけが殴られるのはおかしいと思います。僕も殴ってください!」

殴りやすいようにと頭を下げたが、なにも起こらないし、誰も動かない。顔をあげると、おじいさんは黙って高の目を見た。それから高のひたいをぺしっと手ではたいた。

「高くんへのぼつは、もうさっき済んだ。ひとりだけ2度もぼつ受けんのは不公平ってもんだ。さっさとあがって着がえろ。風邪引くぞ。おまえら、今日はここで泊まりだ」

「……『着がえがある』 つつーから喜んだのに、なんだよこのチョイス」

「文句言うなよ拓登。あるだけマシだって」

スーパ－のシャワー室とタオルを借り、着がえて出てくると、みんなおかしくなっこうになっていた。高と中条に渡されたのは、大人用のジャージとよれよれのTシャツだし、拓登たちに渡されたのは、子供用のTシャツと、パジャマのズボンだった。上のマンションで借りたらしく、みんなサイズが合っていない。靴の代わりはビーチサンダルだ。

「あれっ、そういうや春日たちは？ 中条さん、春日たち、まだ戻ってないの？」

言われてみると、たしかに3人の姿がない。

「ああ、あんどき、『帰ってくん！』ってどなってやったからな」「うわっ、ひでえ！」

「ひでえもんか。あの、いつ水かぶって流されてもおかしくねえような橋、もっぺん渡って戻るって方がよっぽど無茶だ。だからここへ飛んで戻って、残ってた連中に聞いて、どうにかこうにか電話したんだ。『もう、あぶねえからここへは戻るな。今夜はその夏沢マンションの1階の、夏沢のばあさんとこに泊めてもらえ。ばあさんには電話で話してやる』ってな」

「あ、そうか。川のそばがあぶないんだったら、橋はもっとあぶないんだ……」

「今さら、なにのんきなこと言ってやがる」

そういえば、ジョンはどうしただろう。従業員室を見回すと、ジ

ヨンは、着がえ終わった坂井のおじいさんたちといっしょにいた。きれいに体をふいてもらったらしい。高はひとり、みんなのそばを離れてジョンを見に行った。

「タロウや、タロウ」

坂井のおじいさんの声にこたえて大喜びで鼻を鳴らしているジョンを見ていると、ジョンは『ジョン』でも『ルドヴィツヒ』でもなく、生まれたときから『タロウ』だったような気がした。

「おじいさん、犬、好きなんですか？」

「……ああ、子供の頃、タロウって犬を飼ってな。こいつはタロウそっくりだ。さつき避難するときも、みんなを気にして、『大丈夫か？』『がんばれ』とはげましてくれてるようだった。いいやつだ」

そう言っておじいさんはうれしそうに笑い、そのとなりでタロウも笑っているように見えた。高はちよつとさびしかったけれど、タロウがうれしそうだったので良かったと思った。

高の後ろでは、中条のおじいさんがまだみんなに話し続けている。「こっちは、あいつらとばあさんに電話して、それから消防団におまえらのことを知らせるんで苦労したんだ。いっくらかけても、なかなか電話がつながらねえ。おまえらはおまえらで、電話かけても電源切ってやがるし。……おつ、そうだ。そんなことよりおまえら、さっさと弁当食ってこい。腹減ってんだろう」

「お弁当!？」

みんなの声を聞いて、高は急にお腹がすいていることに気がついた。体の力が抜ける。考えてみれば、お昼に給食を食べて以来、なにも口にしていないのだ。

「高くん、早く行かないと弁当がなくなっちまうぞ！」

「今行く! ……タロウ、それじゃまた後でな」

タロウの頭をなでると、高はみんなのところへ走って行った。もうお弁当の取り合い合戦がはじまっている。

「オレこの弁当もーらい!!」

「うわっ、押さないで」

「ちゃんと人数分あんのか!？」

みんな、うばい合うように食べはじめる。どうやらスーパーで売っていたお弁当らしい。お腹がぺこぺこだから、たまらなくおいしい。

大きなテーブルの方では、中条のおじいさんと消防団の人たちが、お茶を飲みながら一息ついている。高たちの食べっぷりに驚いたおじいさんがテーブル越しにどなる。

「おまえら、そこにお茶があるからついで飲め。のどつまらすなよ!」

「みんなすげー勢いだな。外どうだった？」

電話連絡のため、スーパーに残っていた石渡と今宮が寄ってきた。石渡はひとりひとりにマイク、ではなくシャープペンを向けては、せつせとメモを取っている。

「……川、歩いてるみたいだった」

「……人残ってて、びっくりした」

「……雨、ひどすぎてなんか、怖かった」

「……だな。知らない町みたいだった」

「……電話、どうなった？」

石渡はくわしい話が聞きたいらしいのだが、みんな食べる方に夢中で話が続かない。今はロクな話が聞けないとあきらめたらしい石渡は、最後の広瀬の質問に答えて話しはじめた。

「人数減ったし、電話かかりにくくなって時間かかったけど、おまえらから電話かかってくるちよっと前に終わった。それから3人で弁当食べて、山本は家帰った」

「……木島たちは？」

「ああ、あいつら、地図忘れていっぺん戻ってきたんだ。それから出てって中条さんに見つかって。木島のケータイに電話つながったのが8時11分。で、8時28分に、夏沢マンションに着いたって電話あった。2階の英美塾の教室のカギ開けてもらって、みんなで

そこへ泊まるって」

「……なんか、やけに時間、細くないか？」

ごはんの残りをほおぼりながら高が言うと、石渡はニヤツと笑った。

「ああ、正確な時間つけてんだ。後でいい資料になるだろう？」

そう言われてようやく気がついた。

「石渡、新聞部か」

「……だからって、勝手に来やがって……」

広瀬がぶつぶつ言っているのが聞こえる。どうしてこの『前線基地』に、落合の石渡がいるのか、やっと高にも分かってきた。取材熱に燃える石渡が、中条に頼まれて連絡網集めをしていた広瀬と木島にくつついてきたのだ。

「おまえらの話はまた後で聞いわ。おれは上の階で黒川見張る。じやあな。今宮、行くぞ」

言うだけ言うと、石渡はメモをポケットにしまい、大きな懐中電灯を片手に立ち上がった。おとなしい今宮がその後をついて行く。

「そーいや神山、なんで今宮がここへ来てるんだ？ 会田も」

思い出したように中条が口を開いた。

「ああ、人手いるから、国道ぞいのマンションに住んでるやつら、かたっぱしから電話して招集したわけ。近いから、濡れないですぐ来れるだろ。……でさあ中条、オレ、さっきからずつつつと気になつてただけだよ」

「なんだよ」

「オレ、同い年に名字で呼ばれんの、キラйнаわけよ。その『神山』つつーの、キモチワリーからやめてくれる？」

「……うー」

自分の名前の話をさせたら、拓登は止まらない。わざわざ立ち上がると、オーバーな身振り手振りまでつけて語りはじめる。高がうんざりするほど聞かされた話だ。

「なんたってオレの名前はさあ、『将来、大勢の人を指揮するよう

な立派な人間になるように』ってつけられた、スバラシー名前なわけよ。あ、分かってねーな。指揮者が持つてるあれ、あの棒、タクトって言うの。オーケー？ だからおまえら、『拓登』でよろしく。なんなら『拓登様』でもいいんだぜ？」

「ぜってーヤダ」

やり取りを聞いていた若槻がぷつと吹き出した。が、高は笑う気になれなかった。

「拓登、それなら僕だって、『フジヤマ』って呼ばれんの、嫌だ」

一瞬、場が静まりかえった。ニヤニヤ笑いで中条を見下ろしていた拓登が、きょとんとした顔で高を見る。

「だって他にねーじゃん。『フジミノ』ってな、言にくいんだぞ。」

『ミノ』ってあたりが。ならいっそ『ミノ』にするか？」

「やだ」

「……富士見野くん、なんで『フジヤマ』が嫌なの？」

若槻に聞かれて、高は思わずどなっていた。

「なんかバカにされてるみたいじゃん！ 『スシ、ゲイシャ、フジヤマ』から取ったとか言うしさ。最近じゃ中倉先生まで僕のこと『フジヤマくん』って呼ぶんだ」

高は真剣なのだが、みんなはどっと笑い出した。

「さっすが中倉、天然ボケ！」

「本気で覚えまちがえてるよな」

「……それじゃ、拓登くんみたいに、『高くん』だったら？」

若槻は、ひとり一生懸命考えているらしい。

「ダメダメ。『タクト』と『タカシ』じゃ、まぎらわしいじゃん。」

けどさあ、『フジヤマ』って、そんなに変かあ？」

「呼ばれる富士見野が嫌だって言うならしょうがないだろ。おまえが『神山』って言われんの嫌いなものといっしょだ」

「そんじゃ、略してフジ」

「『フジくん』って、言にくいよ……」

みんながわいわいと話しはじめる。拓登の言葉につられて思わず

「嫌だ」と宣言してしまったものの、こうなるとなんだかばつが悪い。

と、一度はいすに座っていた拓登が、もったいぶった様子でまた立ち上がった。

「……なんでかさつつぱり分かんねーけど、どうしても言うならしょーがない。これでどうだ。『ミ』抜いて『フジノ』!」

『フジノ』と同時にびしっと指さされた高はぎよっとした。一瞬しーんと静まりかえった場が、少しずつざわめきはじめる。

「『フジノくん』……」

「『フジノ』ねえ」

「『フジノ』……」

みんなの視線が高に集中する。心の中でとなえてみた。フジノ、フジノ。さらに小声でつぶやいてみた。フジノ、フジノ、フジノ。

「……嫌じゃない」

「よっしゃ決まりい!! やっぱオレ天才!!」

拓登はオーバーにこぶしを突き上げている。これには高も思わず吹き出してしまった。

「ほら、おまえらもほめる、ほめる!」

「なんでそんなことでほめてやんなきゃいけないんだよ」

「『フジノくん』かあ。僕もそう呼んでもいい?」

「もちろん」

なんだ、簡単なことだったんじゃないかと思った。3ヶ月もずっと嫌な思いをし続けていたのがバカみたいだ。

「なになに、フジヤマくんが、フジノくんになったの? なんで?」

いつの間に来たのか、会田がプラスチックの大きなカゴを片手に、座っている高たち一同をのぞきこんでいた。

「……なにしに来たんだ」

会田はみんなでここへ戻ってきた後、上のマンションにある自分の家に帰っていたのだ。

「そんな言い方ないでしょ。感じ悪う。あのね、ママに今日の話

したら、そんなびしょ濡れになったんだったら、みんなの服、洗ってかわかしておいてあげるからもらってきなさいって。今、帰るからここ入れて」

「えっ……？」

みんなは顔を見合わせた。あのびしょ濡れの服をかわかしてもらえるのはうれしい。でも、女の子にあれを渡すのは、なんとなくためらわれたのだ。

そこへさらに、食べ終わるのを待っていたらしいおじいさんが声をかけてきた。

「おいおまえら、食い終わったんだったら、ちゃんとお母さんに『今夜はスーパールの2階に泊まる』って連絡しとけよ!!」

「うえっ!! うるさいからもう電源切ってた。オレ、ママに止められないように、春日たちと先に避難所行ってるつつって出てきたんだぜ? あゝ、まっずう……」

拓登が頭を抱えている。高も拓登と同じ気持ちだった。夕方、集会所を飛び出して以来、全然連絡していないのだ。怒られるのは目に見えている。

「ちよっとちよっとみんな、早くしてよ。停電したりしたら洗たくできないよ」

「……分かった。洗たく物はシャワー室に置きっぱなしだから、おれが取ってきて、会田んちへ持ってく。みんな、早くお母さんに電話しとけ」

「えゝ? 今持ってきてくれたら、私ひとりで帰るよ?」

「わざわざ洗ってもらうんだから、持ってくるぐらいは自分でする」
てきぱきとそう決めて、シャワー室へ向かう中条に、高はあわてて聞いてみた。

「おまえは電話しなくていいの?」

「おれは、どうせじいちゃんといっしょにいの、みんな知ってるからいい」

「分かった。それじゃ頼んだ」

それから、携帯電話を持っている子はいっせいに電話しようとしたのだが、できなかった。電話からは『ただいま大変混み合っております』というメッセージが流れるだけだ。中条のおじいさんによれば、こういうときには、家族や知り合いを心配する人がいっせいに電話をかけるので、電話がつながりにくくなるのだという。さっき、坂井さんの家からすぐに電話できたのは、かなりラッキーだったのだ。

おじいさんが、公衆電話の方がかかりやすいだろうと教えてくれたので、高はスーパ一の階段のところにある公衆電話を使うことにした。拓登はお母さんにメールを送るだけで済ませ、高に「11時45分になったら絶対起こしてくれ」と頼むと、さっさといすをならべてその上で寝てしまった。そうは見えなくても疲れていたらしい。

閉店して暗くなったスーパーの店内を横切り、階段のところへ着くと、若槻が電話を使っている最中だった。やっぱり怒られているらしく、電話の前で小さくなっている。その後ろでは、広瀬が退屈そうにぶらぶらしている。

「もう電話したのか？」

「した」

高の姿を見るなり、広瀬はさっさと従業員室の方へ歩き出した。

「お母さん、なんて？」

「……『もっと早く電話しろ』」

振り向こうともしない。完全に避けられている。

「……それで、なんでやめちゃったんだ？ ファルコンズ」

次の瞬間、すごい勢いで振り返ってにらまれた。

「しつけーんだよ!!」

「だって気になるじゃん!! なんで野球好きなやつが、あんなチームやめたりするんだよ」

数メートルの距離をおいてどなり合った。人気のない店内は静まりかえっているから、ふたりの声だけがよく響く。

「誰がいつ野球好きだったったよ?!」

「あんな球投げられるやつが、野球嫌いなわけないだろ!!」

「……弟ができた!!」

「えっ？」

「母ちゃんが、車、運転できなくなった。おれがひとりで通うのはダメだって!!」

「……あ……そっか……」

ようやく分かってきた。

落合から関口までは遠い。電車はずっと城江の方を回ってから関口へ向かうから、遠回りで時間がかかる。だから、広瀬はお母さんに車で送り迎えしてもらっていたのだろう。ところが、そのお母さんに赤ちゃんができて、送り迎えができなくなった。それでやめさせられたのだ。

「『中学入ったら野球部あるんだから、あと2年ちよつとくらいがまんしなさい』って！」

「うわ、ひつでえ。なんで大人ってすぐ、『2年ぐらい』とか言うんだろうな」

「だからさ、このみんなで野球やったらいいじゃない。きつと、やってみたって子、他にもいるよ。あ、フジノくん、電話あいたよ」

けろつとした声が、どなり合いをさえぎった。電話を終えた若槻だった。

お母さんへの電話は、思ったよりあっさり済んだ。

お母さんはもちろん怒っていたけれど、鳥居のおばあさんから『避難を呼びかける電話連絡をみんなで手伝っている』という話を聞いたらしい。本当は『電話連絡を手伝っていた』ではなく『危険な町へ出てビラを渡していた』なのだが、そんなことが知れたらとてもないことになりそうなので、言わなかった。

お母さんによれば、避難所の方もけっこう大変だったという。

「この集会所、陽光台からも落合からも人が来るから、もう本当にいっぱいになっちゃって。しょうがないから、元気な人はここから、上の和田さんのおうちへ移動したの。お母さんはアンタ待ってたからここへ残らせてもらったけど」

「和田さんちって、どこ？」

「ホラ、ここの集会所の山側のところ、ずっと畑が広がってるでしょ。あそこの真ん中にあるじゃない、古い大きなおうち」

「あそこかあ……」

「和田さんの家は、昔はよく村長さんやってた、この辺じゃ有名な
おうちでね、昔からあのおうちのあたりは災害に強いって有名な
だって。ちゃんとそんな安全なところ探して住んでんだから、昔の人
ってすごいよねえ。それに比べてなによ。『高級住宅街』なーんて
言ってたくせに、陽光台って、よく災害にあうから貧しいお百姓さ
んしか住まないとこだったっていうのよ、もう！」

お父さんは、避難所へ来ても車の置き場がないので、今晚は会社
に泊まるのだという。これなら、竜が出たとしてもかく土石流とい
うのが起きるぐらいなら、家族みんな無事でいられるだろう。高は少
しだけ安心した。

電話を切ると、若槻がまだ階段のところで待っていた。

「ねえフジノくん、上行ってみない？」

「上？」

「うん。中条くんも戻ってこないし、きっと上の石渡くんたちとい
つしよにいると思うんだ。行ってみようよ」

そういえば、会田の家に洗たく物を持っていったはずの中条はま
だ戻ってきていない。

「でも、この上、マンションだろ？ オートロックで入れないん
じゃないか？」

「会田さんの家呼び出したら、きっと開けてくれるよ」

眠そうだった拓登や中条とは逆に、若槻はどんどん元気になって
いく。学校ではあんなに気弱でおどしているのに、今は目がか
がやいている。なんだか別人のようだ。

「……そうかな。じゃ、行ってみようか」

インターホンに出た会田のお母さんが、「『いちばん上の階で見
張ろう』って言ってたから、みんな5階にいるんじゃないかしら」
と教えてくれた。マンションの中にある階段をのぼっていると、若

楓がうれしそうに話しかけてきた。

「フジノくん、神山くんっていい人だね」

「えっ？ ……うん……悪いやつじゃないよ。変わってるけど」

「けどすぐ『陽光台組』『陽光台組』つつって、おれたちと張り合ってるじゃねーか」

黙って高と若楓の後をついてきた広瀬が、後ろでぶつぶつ言っている。

「たぶん、拓登のあれは悪気ないんだよ。チームに分かれて『戦争ごっこ』やってるノリなんだ。けど、いっしょに騒いでる他のやつらが……」

若楓と広瀬にそう言いながら、高は不思議な気がした。本当にそうだ。拓登は別に悪いやつってわけじゃないし、僕は自分で思ってたほどあいつのことが嫌いじゃない。嫌いだったのは、拓登と他のやつらがいっしょになって盛り上がるときの、あのノリなんだ。あのノリにおされて、嫌な話になっても僕が『その話は嫌だ』『やめろ』って、はっきり言えなかったからだだったんだ――

「今日はすごい日だったなあ。ぼく、神山くんとも会田さんともちゃんと話したの初めてだ。……あつ、ごめんフジノくん、なんか喜んでるみたいでごめん!!」

絶対に若楓は喜んでると思ったけれど、怒る気にはならなかった。若楓がうれしそうなのは、『陽光台を災害が襲う（かもしれない）から』ではなくて、『落合も陽光台もなく、みんなで協力してがんばれたから』だと分かっていたからだ。たぶん若楓はずっと、陽光台と落合のいがみ合いに心を痛めていたのだろう。

5階へ着くと、階段室のドアを開けた。泥くさい、しめった空気がどっと流れ込んでくる。雨は相変わらず大きな音を立てて激しく降っている。

雨が降りこんでくるろうかに出ると、そこでは今宮が真剣な顔で作業していた。それを、かたわらに立っている石渡が見守っている。中条は来ていないのかと目で探すと、雨を避けるように壁にもたれて座っていた。どうやら眠っているらしい。

「なにやってんだ？」

「ああ、おまえらも来たのか。今宮が、写真とる準備してくれてるんだ」

「写真？」

声をかけられても今宮は答えない。三脚に小さなカメラをつける作業に熱中している。代わりに石渡が説明してくれた。

「おれ、ここで黒川見ながら、このケータイで写真とる練習してたんだよ。そしたら今宮が、『そんなんじゃ無理だ』って。おれはやっぱ写真欲しいし、『それじゃどうすりゃいいんだよ』って聞いたら、あいつ、急に自分のカメラ持ち出して、『これでとる』って」「えっ、じゃ、今宮くん、三脚なんて持ってきてたの？」

「あれはさっき、山本んち行って借りてきたんだよ。びっくりしたよ。急に目つき変わっちゃってさ。『おまえ、カメラマンじゃなくて記者なんだろ。カメラじゃなくて自分の目で見て記事書けよ』ってさ。ちよっと感動した。おれは記者として文字で勝負する！」

石渡はシャープペンを持った右手を突き上げると、おおげさに話をしめくくった。

「……写真ヘタだしな。いつもピント合ってない」

強い雨音に混じって、背後から広瀬のツツコミが聞こえる。とっさに笑いそうになるのをこらえた。そういえば、校内に張り出される新聞に、ブレてなにが写っているのかよく分からない写真が堂々と張ってあったのを見たことがある。どうやらあれは石渡の作品だったらしい。

「黒川はどうなってる？」

「それぞれ！！ 聞いてくれよ。なんか、20分くらい前から、水減ってきてんだよ。雨は、おまえらが出てったときよりはマシになってるけど、絶対おかしい」

金属のパイプでできた手すりへ近づき、マンションの横を流れる黒川を見た。川の水は怖いぐらいの勢いで流れていたが、水かさが減ってだいぶ川の護岸が見えている。あれならもう橋は渡れそうだ。「もう大丈夫なんじゃないかなあ」

「違う！！」

高と同じことを考えていたらしい若槻の意見を、石渡がすぐに打ち消した。

「おまえらはずっと見てないからそう思うんだよ。30分くらい前までは、道まで水あふれてたんだぜ？　それが急に減ってきたんだ。早すぎる。あっ、また減ってる」

言われてもう一度川を見た。たしかにさっきより水が減っている。道路から川底までの高さはだいたい3メートルぐらいなのだが、今や川の水はその半分ぐらいの高さしかない。

「……なんか気持ち悪いな」

「だろ？　こりゃ、やっぱ来るって、絶対。えーと11時29分つと……」

言いながら石渡はメモを取っている。相変わらず正確な時間を記録しているのだろう。床に置かれた懐中電灯にはラジオがついているらしく、雨の音に混じって、アナウンサーの声らしいものがかすかに聞こえてくる。

「……ねえフジノくん、なんか、変なおいしない？」

「……くさい」

「なんのにおいだ？」

みんなが顔を見合わせた。生ゴミがくさったような、でもちよつと違うような、変なおいがただよってくる。

「……この辺のおうちかなあ」

「家のゴミとかなら、こんな急におわないだろ」

「違う。山の方からおう」

広瀬がきっぱり言った。風は山の方から吹いていたから、たぶんまちがいないだろう。

「山……」

みんな黙って山の方を見つめた。たまに低い、ゴロゴロという音が響くのは、あの山が鳴っているのだろうか。

本当に起きるのは土石流なのか。竜じゃないのか。もし竜が出たりしたら、こんなところにいたらあぶないんじゃないだろうか。山を見ながら高はそんなことを考えていた。それでも、下のスーパ―へ戻ろうとは思わなかった。みんなといっしょにいる方が、なんとなく心強かった。

と、横から『ピッ』というカメラの電子音が聞こえた。

「……停電しなきゃいいけど……」

今宮は、三脚の前にひざをついて作業を続けていた。カメラの高さや向きを合わせ終わり、今はカメラの設定をチェックしているらしい。高は近くへ行ってみた。手すりのそばなので雨がかかる。カメラには、雨よけにビニールのようなものがかけてあった。

今宮は陽光台の子だったが、高はほとんど話したことがなかった。だいたい、休み時間に誰かといっしょに遊んでいるのを見たことがない。いじめられているわけでもないのに、なんだか暗い目をして、いつもひとりですごしていた。

しかし、目の前の今宮は、うっかり邪魔したらキレられそうなくらい真剣な目をしていた。石渡が言うとおりに、こんな今宮は見たこ

とがない。

「……そのカメラ、おまえの？」

カメラは、それを支える立派な三脚には不つり合いな、小さなデジタルカメラだった。

「……父さんの」

相変わらず今宮の視線はカメラに注がれたままだ。返事があるとは思わなかったので、高はちよつと驚いた。

「借りてきたんだ」

「……お守りなんだ」

なんだか話がかみ合っていない。それでも高が聞き流していると、今宮はひとりごとのようにこう続けた。

「……神山に呼ばれて、家、出るとき、なんとなくポケットに入れたんだ。使うと思わなかった」

「持ってて良かったな」

なにげなく言うのと、今宮が急に高の方を見た。そしてぽつりとう言った。

「……父さんが、『持って行け』って言ったんだ」

「そっか」

今宮は、なにごともしなかったようにカメラに視線を戻し、ためしどりはじめた。黒川の上の橋あたりをねらっているらしい。

「こんな暗いのに、あんな遠くの景色なんて、とれるのか？」

「……このカメラじゃダメだと思う。ためしどりをしたけど、たぶん写ってない。でも、やるだけやってみる」

と、外がぱつと明るくなった。雷だった。大きな雷鳴がすぐ後から追いかけてきた。

「いま、稲妻走ったの見たよな」

「山の方だ」

あわてて高は携帯電話を取り出した。11時41分だ。もうあと20分ほどで12時になる。本当になにか起きるのか。あれ？ 11時45分になにかあったような……

そこで高は急に、拓登との約束を思い出した。とっさに持っている携帯で電話をかけると、運が良かったのか、今度はすんなりとながった。

「……はい、だれ?……」

「僕だけど、拓登、起きてる? もう45分になっちゃうぞ」

「……えー、なにい? よんじゅうごふんがなん……あっ!!」

ようやく目が覚めたらしい。

「フジヤ、いやフジノか? いまどこにいる? なんだよ、みんないねーじゃん」

「上のマンションの5階のろうか。みんな来てる」

「そういうことならオレもさそって行けよ。今行く!!」

もう一度時間を確認すると、もう45分になっている。あと15分だ。緊張してきたのが自分でも分かる。雨のせいで空気がしめつていて、なんだかむし暑い。

やっぱりみんな緊張した顔をしている。若槻と広瀬はならんで山の方を見ている。石渡と今宮は顔をつき合わせて、ためしどりの写真に景色が写っているかどうか話している。小さなデジカメのモニターは小さすぎて、暗いろうかではよく見えないのだ。

黒川の水量は減ったままだ。夕方、山道を歩いていたときには暗い灰色だった川が、今では赤茶けたような色に見える。水の色が変わったのか、明かりのせいでちがう色に見えるだけなのか、よく分からない。

「どうなった!??」

階段室のドアが開いて、拓登が飛び出してきた。

「ああ、黒川の水が減ってきて、雷鳴って……」

「えー!?! 水、減ってきたのか? じゃ、この雨がやんだらもうおしまいかな?」

「違う」

きっぱりとした声がそう言った。中条のおじいさんだった。拓登といっしょに様子を見に来たらしい。

「いつごろから減りだした？」

「20分くらい前だって、石渡が言っていました」

「え」と待て待て。最初に気がついたのが11時12分で、29分には半分ぐらいまで減っていました」

石渡がすかさずメモを取り出して答えている。

「他にはなにかあったか？」

「変なおいがしてたよね……あれ、ちょっとマシになった？」

「やっぱ、どっかの家がゴミ出したんじゃないの？」

今宮と中条以外はみんなおじいさんの周りに集まってきて、がやがやと報告しはじめる。おじいさんは、みんなの顔を見ながらしばらく黙って聞いていたが、ふっと山の方へ顔を向け、ぼつりと言った。

「……もう、じきに来るぞ」

おじいさんの言葉に、みんな同時に息をのんで口をつぐんだ。そろって山の方を見る。

「覚えとけ。こういうとんでもねえどしゃ降りるとき、急に川の水が減り出すのも、変なおいがすんのも全部、山津波、いや、土石流が起こる前ぶれだ」

山を見た。栗の木山も、となりの菅山も暗くてよく見えない。黒川だけが、川ぞいの道の街灯で明るく照らし出されている。

雨粒がまじった、なまあたたかい夜風が吹いてくる。夜も遅いの、ちつとも眠くならない。

「あれっ？ 中条のやつ、寝てんのかよ。こんなときにノーテンキなやつだな。おい、起きろ！」

みんなが緊張して黙り込んでいる中、親切のつもりなのか、それともさつき自分が起こされた腹いせなのか、拓登が中条をたたき起こしている。

ラジオの音が大きくなった。石渡がボリュームを上げたらしい。時報だ。チッ……チッ……チッ……ポーン！

まさにその瞬間、上空から栗の木山へ向かって、描いたようにあ

ざやかな稲妻がさっと走った。あたりがぱっとまっ白になった。

「キヤアッ!!!」

『ピシャーン!!! ドロドロゴロゴロ……』

若槻が悲鳴を上げて、中条のおじいさんにしがみついた。ほとんど同時に、建物がふるえるほどのすごい雷鳴が響く。

「大丈夫だ。ここなら安全だ。怖いことはない」

おじいさんに背中をたたかれて、若槻は少し恥ずかしそうな顔を見せた。が、誰も若槻を笑えなかった。高はびくりして心臓がのどまで跳ね上がったような気がしたし、拓登や広瀬も顔が青ざめている。

「……来ないですね……」

緊張でこわばった顔をしながら、石渡がおじいさんに話しかけた。「なに、もう時間の問題だ。川の水が半分になってからもう30分以上だろう? もう来る。……そーいやさつき、役所の武石さんから連絡があつてな、避難所で調べたら、もうあの避難範囲の中に住んでる人は、みんなちゃんと避難してたそうだ」

「良かったあ!」

「間に合ったんだ!」

と、地の底から響いてくるような、低いゴーツという音が、みんなの歓声を飲み込んだ。マンションが激しく揺れ出す。不意をつかれて数人がしりもちをついた。

「地震だ!!!」

「違う! 来るぞ!!! 手すりから離れろ!!! 腰を落とせ!!!」

「来たあ!!!」

最後の石渡の大声は、ゴーツともドーツともつかないすごい音にかき消された。言われなくてもみんな見ていた。ふたつの山の谷間から黒川が流れ出してくるあたりから、高い壁のようなものが勢いよくふき出してくる。2階の窓に届きそうな高さだ。その上には大きな岩や木のようなものがいくつも乗っている。谷間からどつと噴き出した『高い壁』は、さえぎるものがなくなったので一気に横へ

広がった。川の両側の道路をあつという間に飲み込み、さらにその外側にある家々へどっと襲いかかる。ほんの一瞬のできごとだった。

『高い壁』が黒川にそってすごい速さでこちらへ向かってきて、大波のようにわっと崩れた瞬間、あたりは真っ暗になった。ゴーツという音、バキバキとなにか壊れるような音、岩がゴロゴロ、ガチガチ鳴る音が暗闇に響く。床はまだ揺れ続けていた。

「みんないるかーっ!!」

おじいさんが叫んでいる。高は床にひざをついたまま、手探りで人を探した。先に右の手が、次に左の手が、それぞれ誰かにふれた。手を取ると、どちらからも強く握り返された。どちらの手も温かく、汗ばんでいた。

ついさっきまで見つめていた方を向いて、目をこらした。すべてはもう闇の中だった。

その代わり、明かりが消える直前に見た光景が目には焼きついていてた。黒川に乗って伸びる泥の壁の先頭が、こちらに向かって崩れる。壁の上の方から、まるでなにかに襲いかかる怪物のきばみたい。

そうか、あれは竜の口なんだ。竜は本当に出たんだ……。マンシヨンに住んでいる人たちがろうかに出てきて騒ぎはじめる中、高はそう思った。

結局その夜、土石流は3度、陽光台を襲った。できたばかりの新しい町だった陽光台は、一晩で泥の町になった。

黒川が山から流れ出るあたりは、大人が胸までつかるほど深い泥や岩や木や折れ枝でうまってしまった。黒川に近かった2軒の家は完全につぶれてしまったし、他にも数軒、大事な柱が折れたりしてあぶないので住めなくなったという。高たちが避難を手伝った坂井さんたちの家も、そのうちの1軒だった。1階の部分が半分ぐらくずれてしまったらしい。お母さんたちは、「建てたばかりの家があんな簡単につぶれるなんて、絶対ギョーシャの手抜き工事だ!」と怒っていた。

つぶれずに済んだ家にも、土石流は窓やドアを壊して流れ込んでいた。1階の天井まで泥で汚れていた家もめずらしくない。

消防団の人たちが夜通しがんばったおかげか、中川の方ははんらんしなかった。雨がやんで、次第に水位も下がってきたので、昼すぎになって、落合小学校の体育館が避難所になった。

高は結局、明け方になってから眠ってしまった。

電話が鳴ってもまったく気づかず寝ていたので、探しに来たお母さんに起こされた。他のみんなの姿はなかった。スーパ―の人に聞くと、それぞれもう家へ帰ったり、避難所の家族のところへ行ったりしたという。学校は、この日は臨時休校になっていた。

まず、坂井のおじいさんたちといっしょにいたタロウを家へ返しに行った。タロウの家は無事だったけれど、庭は泥だらけだった。家の人は誰も帰っていなかった。

泥でうまってしまった道路が通れるようになるまで家には帰れなかった。高はお母さんといっしょに小学校の体育館へ行った。拓登は両親といっしょに親せきの家へ避難したという。

他の友達を探して歩いていると、カーキ色のジャンパーとズボン姿のおじさんに声をかけられた。小柄でがっちりした人だったが、黒ぶちメガネの奥の目はやさしそうだった。

「君が富士見野くんかい？」

「……えっ？ はい」

「初めまして。城江市の防災課の武石です。中条さんから聞いたよ。昨日はお手柄だったねえ。こんな大きな土石流が起きて家も壊れたのに、住んでいた人がみんな無事だなんて、君が早くに危険を知らせてくれたおかげだ。ありがとう」

笑顔で肩をたたかれて、高は困ってしまった。自分がやっていないことでほめられるのは、なんだかおちつかない。

「……僕、危険を知らせたりしてません。土石流が起きるなんて、全然思いませんでした。だからお手柄じゃないです。僕は、その、り、『竜が出る』って聞いただけで……」

「竜は出ただろう？」

「やっぱり土石流が『竜』なの？」

「うん。昔の人はそう言ったんだ。山からすごい勢いで下ってきて、家や人をのみこんでしまうから、竜みたいだと思ったんだろうね。」

『竹下』って地名も、昔は『滝下』だったんじゃないかっていうよ。昔の人は、竜は滝に出ると思っていたから、竜が出るところの川下って意味で『滝下』。名前で『ここは竜が出るところだよ』って教えていたんだ」

「……………」

「しかし、不思議な話だね。昔の人が土石流が起こるのを知らせてくれるなんて。でも、ふたりも証人がいるんだから本当なんだろうなあ」

「……『ふたり』？」

ばつが悪くてうつむいていた高は、そう言われて初めて顔を上げた。他にもあのおじいさんを見たという人がいるんだろうか。

高に聞き返された武石さんは、不思議そうな顔をした。

「あれっ、聞いてなかったのかい？ 中条さんだよ。雨も降ってなくて、誰もそんな心配してなかったのに、『もうすぐ竜が出る』って言って村の人たちを避難させた。そしたら大きな土石流がドーーーー！！ もう50年以上も前のことだけど、この辺ではもう伝説だね」

「雨が降ってないのに起きたの？」

「大きな地震があると、それで山が崩れて、急に起こることがあるんだ。怖いものなんだよ。君たちも無茶しちゃダメだぞ」

「どうやら、子供だけで大雨の中を出歩いていたことも聞いているらしい。いたずらっぽく笑いかけると、武石さんは忙しそうに走って行った。」

夕方になって、石渡が体育館をたずねてきた。

「あっ、富士見野いた！ 探したぞ」

「どうしたんだ？」

「コンタがさ、やったんだよ！」

「『コンタ』？」

勢いよく話しはじめたところで、いきなり水をさされた石渡は変な顔をした。

「今宮のことだよ」

「なんで『コンタ』？」

「ホラ、『ミヤ』つつつたら宮田とまぎらわしいだろ。『今』だから『コン』で、コンタ」

分かりにくい石渡語を必死で訳してみる。どうやら今宮の『今』の字を音読みして、そういうあだ名をつけた、ということらしい。

「で、今宮がなになって……あっ、そうか、写真……！」

「当たり前……！ 見ろよ、これ」

石渡が大事そうに取り出したものを見て、高は思わず歓声を上げ

た。

「……写ってる!!」

ノートほどの大きさにプリントされたその写真は、黒1色と言っているくらい暗かった。しかしそのまん中に、街灯らしいかすかな明かりと、その明かりに照らされた白い物体が小さくぼんやりとだが見えている。あの土石流に乗ってきた大岩だ。土石流の動きが速すぎて、ひどくブレたような画像になっていたが、かえってそれが生々しい迫力を伝えていた。

「すごいだろ！　すごいだろ!!　竹下はずっと停電してるから、明け方、もう外へ出てでもいいって言われんの待って、うちのパソコンでチェックしたんだ。写ってんの見たときには、もう感激したぜ。取材に来てた記者さんたちも、みんなすげーほめてくれた」

石渡は、まるで自分のことのようににはしゃいでいる。

「……ワタだってほめられてただろう？」

いつからいたのか、石渡の後ろに今宮が立っている。高は思わず今宮に抱きついた。

「やったじゃん！　すごいよ今宮!!」

体を離して見ると、今宮は照れたように笑っていた。笑顔を見たのは初めてだった。

石渡のあの取材メモも、細かい記録が役に立つと、取材に来ていた記者の人や、調査に来ていた人たちを喜ばせたらしい。

「木島たちにも会ったぞ。橋で流されかけたの、あれ、春日だってよ。それをとっさに木島が止めたんだって」

「へえーっ」

木島というと、サッカー部での嫌な印象しかない。あいつがとっさに陽光台の子を助けるなんて思わなかった。

「『こっち帰ってこなくて良かったな、帰ってきたら中条さんにひっぱたかれてたぞ』って言ったら、中条さんが電話で頼んでたらしくて、あいつらは夏沢さんにこっぴどく叱られたってさ。昨日は英美塾の教室で、夏沢さんも入れて4人でいろいろ話したって」

その日も昼から学校に来て、新聞部の先輩たちに写真とメモを見せてくやしがらせたというふたりは、今度は土石流でうまった町の写真をとるんだと言って飛び出して行った。ほとんど寝ていないはずなのに、どう見ても元気そうに走っていくふたりを、高は感心しながら見送った。

その翌日の放課後、高は中条のおじいさんをたずねた。学校で、『話があるから家へ来いってじいちゃんが言ってた』と中条に言われたのである。

落合の方では停電もなく、町はいつもと変わらなかった。中条はお店の手伝いがあつて先に帰っていたので、高はひとりで寿司屋に入った。お店の人に頭を下げると奥へ上がり、せまい階段をのぼる。おじいさんは、2日前と同じようなかっこうで座っていた。

「おう、高くんか。よく来たな」

「おじいさん、栗の木山であのおじいさん見たことあるって、本当？」

おじいさんの顔を見たたん、高はあいさつをするのも忘れて聞いた。ずっと気になっていたのだ。

「誰に聞いた？」

「えーと、あの、なんだっけ、シヤクシヨの武石さんって人」

「ああ、武石さんに会ったのか。本当だ。おれがガキの頃……今の高くんよりは大きかったがな、親父とケンカして、家出しようと歩いてたら、あんなところで変なじいさんに会っちゃった。結局、出て行くはずだった村へトンぼ返りさ」

「そうだったんだ」

「うちは竹下の貧乏な農家でな。だが、おれはどうも百姓仕事に性に合わなかった。釣りが好きで、いそで会うオヤジがパッパッパッと魚さばく手つきにあこがれて、寿司屋になると決めたんだ。でも親父は、あのやせた土地をおれに継がせたい。で、大げんかして家飛び出した。金がないから汽車には乗れねえ。それで歩いて山越

えてやろうと思ったら、神社の参道のところに変なじいさんが立ってんだよ。黙ってこう、おれを手招きしてな。何かと思って川沿いの道から外れて近づいたら、急にドーッとときやがる」

「土石流？」

「違う違う。でかい地震だ。川沿いのあの道も、まだ柵もねえただの山道だったんだが、揺れでだいぶ崩れやがった。あのまままっすぐ歩いてたらあぶなかったろうな。びっくりしてじいさんを見たらあれだ、『竹下に竜が出る！』。それももうじきだってんだ。あっちこっち崩れてる山道を必死で飛んで帰ったさ。家族はもちろん、川に近いところに住んでる人たちや川沿いの田んぼが無事かたしかめてる人らを必死で川から離れさせてな。すごい顔してどなるから、みんなおれがおかしくなったと思ったらしい」

それでも、子供なのにひとりでみんなを避難させられたおじいさんはすごいと高は思った。

「おじいさんは、竜ってなんだか分かったの？」

「ああ、おれのじいさんに聞いたことがあったからな。……高くんは、あそこの石碑、見たか？」

「えっ？」

「じいさんが立ってた後ろに、でかい石が立ってただろう」

「うーん、なんかあったつけ……」

あのおじいさんの印象が強すぎて、高は周りの景色までよく覚えていなかった。

「もう200年以上も前に、竹下村の村長むらおさが建てたっていう記念碑だ。山が安全になったら一度見てくるといい」

おじいさんによると、その石碑は、竹下村に住んでいた村人の7割以上のがまれて亡くなった山津波の後で建てられたものだという。『黒川の竜に、一度に47人の村人がのまれて死んだ。あたりが白く見えるほど雨が降ると、黒川には竜が出る。なにをおいても山と黒川から離れた高台へ逃げろ』

石碑にはそう刻まれているのだそうだ。

「その村長が、おまえが見たあのじいさんだ」

「そうなの!？」

「おれはそうだと思ってる。じいさん、碑を立てただけじゃ安心できなかつたんだろうよ。今でも黒川に竜が出ないか見張ってたんだ。もう誰も死なせるまいと思ってるな」

「……………」

あのととき、必死で高に危険を伝えようとしていたおじいさんの姿を思った。きっと村長は本当につらかつたんだろう。200年以上たっても黒川から離れられないぐらいに。

「しかし、久栄山の奥には土砂ためるダムもできてんだし、もう山津波を見ることがないだろうと思つたんだがな……」

おじいさんは、高を避けるように横を向くと、ふうつとタバコの煙を吐いた。なんだかため息のようだった。

「なあ高くん、なんで、ダムが山津波を止められなかったか、分かるか？」

「えーと……ダム作つた人が考えたより……その……力が強かつたとか」

「高くんは頭がいいなあ」

急に聞かれても、『ダム』というのがどんなものかもよく分からない。悩みながら答えると、大きな骨張つた手で頭をくしゃくしゃつとなでられた。

それから、おじいさんはこう説明してくれた。

昔の人は、木を切つて売つたり、その木を使って炭を作つたりしていたので、山を大事にしていた。いい木を育てるために、山に入つて雑草を刈つたり多すぎる木を切つたり、こまめに手入れしていた。そうしないといい木は育たないのだそう。

ところが今は、もうからないので誰もそういう仕事をしなくなつた。それで山が荒れて、土に深く根をはる大きな木が育たなくなつてしまったのだという。自然に生えてきた木は、根の浅い、弱いものが多くて、山の土をすっかり支えられない。だから、大雨が降る

とすぐに、しかもたくさん土が崩れるようになった。

昔は、そんなにたくさん土が崩れるようになるなんて誰も考えていなかった。だから、昔作られた小さいダムだけでは土石流が防ぎきれないのだという。

「……『山が荒れる』のも、崩れやすくなるのも、良くないことなんだよね。良くないって分かってるのに、みんな、なにもできないの？」

大人だったらなんとかできるんだろうと思ったのに、おじいさんは苦笑いした。

「……なんとかしようとかがんばってくれてる人たちはいるんだが、なにしろ荒れた山は多いから、全部にはなかなか手が回らねえんだ。難しいな……」

なんだかおじいさんを困らせてしまったようなので、高はそろそろ帰ることにした。

「うん。いろいろ教えてくれてありがとう。また遊びに来てもいい？」

「ああ、おれはひま人だからいつでも来いよ。……おい待て高くん、おれがなんのために呼んだと思ってんだ。ごほうびだ」

「ごほうびって、なんの？」

「『なんの』って、おまえ、がんばっただろう？ おかげで誰も山津波にのまれずに済んだ。坂井のぼあちゃんが泣いてたぜ。おまえらのおかげで助かったってな」

「……あれは、広瀬やみんなががんばってくれたからだし……それにあぶないからって言われてたのに聞かなくっておじいさん怒らせちゃって……」

「ああ、勝手にあぶねえ外をほっつき歩いたことは許さん。おかげでこっちは心配で寿命すり減らしたからな。大人だってみんな命がけでやってんだ。なにがどうあぶないかも知らん子供は絶対にやっちゃいかん。ああいうことはな、大人になって消防団入ってやれ」

厳しい顔をしてそう言ったおじいさんは、そこまで言って急に表

情をやわらげた。

「……だが、おまえらが、みんなに危険を知らせようとよくがんばったのは本当だ。特に高くん、あのじいさんの話、おれたちに知らせるのはものすごい勇気が要っただろう。それをがんばって知らせてくれたおかげで、みんなを避難させられたんだ。ごほうびぐらいもらう資格はある。おまえ、野球やりたいんだろ？」

最後に思いがけないことを言われて、高はびっくりした。

「えっ！？　な、中条に、あーっと、孝平くんに聞いたんですか？」

「なに言っただ。おととい、スーパで、彰とふたりして野球野球叫んでたじゃねーか」

「あ……」

言われて初めて気がついた。電話をかけに行ったときだ。大声で叫んでいたから、おじいさんたちがいた従業員室にまで、その声が聞こえていたのだ。

「それでだな、高くんのがんばりに対するごほうびとして、おれが野球チームの監督やってやるってのはどうだ？」

「えっ！？」

思いがけない言葉に、高はしばらく、どうしていいのか分からなかった。急かすつもりはないらしく、おじいさんはのんびりタバコを吸っている。

「……で、でもっ、チームって言われても、メンバーいないし……」

「なに言っただ。いないんだったら集めりゃいいだろう」

「でもっ、陽光台には野球やるやついないし、落合だって、広瀬もやるかどうか分かんないし、他にやりそうなやつなんて……」

「おいおい高くん、そんなやる気のねえことでどうする。それじゃ、このまま中学までがまんしとくのか？」

「それはやだ！！　けど……」

「ちっとは頭使えよ。『陽光台には野球やる子がいない』って、そりゃおまえ、5年生だけの話だろ。落合だってそうだ。もっと4年や6年にも募集かけろ。中川グラウンドの方にも張り紙して、川向

こうの子らにも呼びかけたらどうだ。陽光台から3人、落合から4人、川向こうの西原から2人、これだけでも9人になるんだぞ？」

「そっか……」

おじいさんの話を聞いているうちに、絶対に無理だと思っていたメンバー集めが、なんとかかなりそうな気がしてきた。

「おまえらでポスター作って、うちの電話番号、連絡先として書いてけ。参加希望はおれが受けてやる。……おとこのアレに比べりゃ楽な仕事じゃねえか。なあ？」

高は笑い出した。本当にそうだ。半日であんなことができたんだ。野球のメンバーをあと8人集めるなんて、全然たいしたことじゃない。

「うん。やってみます。おじいさん、お願いします!!」

試合前のあいさつみたいに、おじいさんに向かってぽつと頭を下げた。体の中で、なんだかワクワクするものがめぐりはじめたような気がした。

あれから、高たち5年生の間ではいろんな変化が起きた。なかでもいちばん目立ったのは、先生に頼み込んで転部する子が続出したことだった。

最初に転部したのは拓登だった。なんと理科部をやめてサッカー部に移ってきたのだ。じょうだんかと思ったら本当だった。

体育の授業で知っていたが、拓登は運動が苦手だ。だからサッカー部では、パスの練習をすれば空振りして4年生に笑われるし、ラニングすればひとりだけ遅れるし、いつものえらそうな拓登とはまるで別人みたいになっている。もちろん試合にはほとんど出られない。それでもやめる気配はなく、意外なほどがんばっている。

どうしてわざわざ苦手な運動部に移ろうと思ったのか、高はなんとなく聞けずにいる。が、一度、こう聞いたことはある。

「拓登、『頭がいい人間は、つまらない選手じゃなくてカントクになる』んじゃないかったのか？」

前と変わらずえらそうにふんぞり返った拓登の答えはこうだった。「な〜に言っただろ。サッカーでも野球でも、『名カントク』って呼ばれる人たち見てみろよ。み〜んな若いときには選手やってっだろ。上手だろうと下手だろうと自分で選手やってがんばった経験がなきゃ、いいカントクにはなれないのさ」

前の答えよりこっちの方が正しいと高も思う。

サッカー部にはもうひとり、転部してくる子が現れた。会田である。

会田はあれきり、『女の子らしい女の子』には戻らなかった。カラフルなTシャツにジーンズというかっこうで登校してきた会田は、クラスメートの多くに転校生とまちがわれていた。きれいな長い髪は、後ろでひとつにたばねていたが、そのうちばっさり切ってしまった。

それまで女子のサッカー部員はいなかったので、先生に会田を紹介された部員たちはみんな、ちよっとうれしそうな顔をした。が、それは半日と続かなかった。

練習試合に途中から出してもらった会田は、とたんにもものすごい勢いで相手チームに襲いかかったのだ。スライディングでボールを奪う、あざやかなドリブルで敵をかわして独走する、6年生のキーパーが青ざめるようなシュートを決める、もうやりたい放題だった。サッカーがやりたくてやりたくてたまらなかった気持ちが爆発したらしい。

そして会田は、あっという間に6年生を押しつけ、サッカー部の中心選手になった。高たちは、あっけにとられてそれをながめるだけだった。

サッカーといえば、5年生のクラスでは、会田の呼びかけで毎月1回、陽光台と落合の対抗戦が行われるようになった。試合が近づくたびに、クラス全体が二手に分かれて火花を散らす。

「今度こそ落合チームをボロクソに負かしてやる!!」

「もやしばっかの竹下にはムリムリ!!」

担任の中倉先生は、それを見て初めて、陽光台と落合の『対立』に気がついたらしい。「落合の子も陽光台の子も、同じクラスの仲間でしょう! 仲良くしなきゃダメよ」と必死でうったえている。効果は上がりそうにない。

次にクラスのみんなを驚かせたのは、あの日、危険な黒川を渡って陽光台1丁目を回った3人、つまり春日と宮田と木島が、いっせ

いに合唱部へ移ったというニュースだった。

あの後、春日は木島たちとつるむことが増え、拓登の家に来ることは減っていた。あぶないところを助けてもらったんだし、あの晩に仲良くなったんだろうとは思ったが、みんなで合唱部に移ったのはどうしてなのか。ちょっと気になったので、学校帰りの春日をつかまえて話を聞いてみた。

「あゝ、あんどき、バンドやろうぜって話になったんだ」

「バンド!？」

「けど、うちのガッコ、楽器やるクラブねーじゃん？　しょーがねーから合唱部」

そう言って、春日はばつが悪そうに苦笑いした。笑ってはいけないのだが、やっぱりおかしい。バンドとコーラスではノリが違いすぎる。

あの日の晩、避難した英美塾で、3人は不思議なほどいろんなことを話したのだという。

「あんどき、もし今日のことをママに話したらきつと、心配すんじゃないくて、『なにバカなことやってるの！　風邪でも引いたら勉強がおくれるでしょ!』って怒るだけだって言っただ。そしたら木島も宮田も、うちの親もそうだって。おかしいよな。おれたち、必死でみんなに危険知らせて、木島なんかおれが足すべらしたの助けてくれたのに、そんなことより、ちょっと勉強がおくれる方が大事だなんてさ。勉強だって、いくらがんばってやったって、テストの点が悪けりゃ怒る。他のこといくらがんばったって無視。絶対おかしいって3人で盛り上がって。なんだ、おれひとりじゃないんだって思ったら、なんかすげー嬉しくなって」

うんうん、とうなずきながら聞いた。勉強しなくてもテストでいい点が取れて、いつもお母さんがごきげんな拓登の前では、こんな話は絶対できない。

「そしたら夏沢のばあちゃんが、『親の顔色ばかりうかがってないで、自分が本当に好きなことをやらなきゃ人生つまんないよ!』

って言うんだ。そしたらそれ聞いた木島が急に『オレはバンドやってみたい!』って言い出して。それ、いーじゃんいーじゃんって盛り上がってさ。城江の駅前の、あのでっかい陸橋の上で人集められるようになるうぜって」

こんなに楽しそうに話す春日を、高は初めて見た。宮田や木島が前より明るくなったように見えるのも、この『バンドやろうぜ計画』のせいかもしれない。

しかし、たぶんいちばん変わったのは若槻だろう。勉強の方は相変わらずだったけれど、おどおどしたところが減って、ずいぶん積極的になってきた。最近では、他の子にからかわれても、ちゃんと言い返している。

高がメンバー募集をはじめた野球チームに、真っ先に加わったのも若槻だった。高は、てっきり若槻が自分たちを喜ばせようとして「自分もやりたい」と口にしただけだと思っていたので、これはかなり意外だった。

いっしょに『メンバー募集』のポスターを張って回っているとき、初めてその理由を聞いた。若槻は、プロ野球の山口選手の熱烈なファンだったのだ。山口選手も、所属しているチームもそれほど有名ではなかったのに、高は名前を聞いてもぱっと分からなかったのだが、とにかく守備が上手いのだという。

「前に体育でソフトボールやったときは、ぼく全然ダメでさ。打てないし取れないし。けど山口さんが、『守備は練習すればするほど上手くなる』って言ってたから、ぼく、やってやるって決めたんだ。フジノくん、ぼく、山口さんと同じショートやってもいい?」

「……うん。他に上手いショートが来なかったら」

「分かった。ぼく練習する。メンバー、早く集まるといいねえ」

広瀬をチームに引っぱりこむのは大変だった。あれだけ野球がやりたそうだったのに、いざさそってみると「竹下のやつのチームになんか入れない」と言い張ったのだ。

広瀬と親しい中条に相談してみると、中条はとんでもないことを言い出した。高が広瀬と勝負して負ければいいというのだ。結局、中条が提案した『3球続けて高からストライクを取れたら広瀬の勝ち、取れなかったら野球チームに入る』という、ちょっと変わったルールの勝負をすることになってしまった。

（普通、ピッチャーが何球か投げて、そのうち何球か打てたらバッターの勝ちってルールだよなあ……）

放課後の校庭で勝負ははじまった。その第1球を見て、やっと高にも、中条が変わったルールを提案した理由が分かった。広瀬の球はとんでもなく速かったのだ。そんな速い球は、バッティングセンターでしか見たことがなかった。急に打てるわけがない。

負けるわけにはいかないと必死で打ちに行っても、バットはむなしく空を切り、キャッチャーをしている中条のミットに収まる。ワンストライク。2球目はかろうじてバットにかすったが、打ち返せない。ボールは後ろへ飛んでいった。ツーストライク。

広瀬はピッチャーにしては小柄だったが、バッターとして見るとやけに大きく見えた。まずい。気圧されている。広瀬が振りかぶる。いちかばちかで思い切りバットをふろうとした高は、次の瞬間、必死でそのバットを止めた。あの球はボールだ。打てっこない。

高すぎる球は高の頭上を越え、校庭の端にあるフェンスめがけてすっ飛んでいった。それを追いかける中条が大声で叫んでいる。

「ボールだ！ ボール！ アキラの負け！！」

広瀬は中条が戻ってくるのを待たず、ぶすっとした顔で校庭を出て行く。あわててその背中に向かって「今度の土曜日の9時、中川グラウンドで集合だからな！」と叫んだ。返事はなかったが、高は心配しなかった。負けるためにわざと大暴投したぐらいだ。絶対に来る。

でも悔しかった。完敗だ。

高は中条もチームにさそったのだが、正式なメンバーにはならなかった。土日の練習には出たくないからだという。

「なんで土日がダメなんだ？」

「おれ、栄浜へ釣り行くから。休みの楽しみだから、これだけはゆずれない」

「……分かった」

中条が、店の手伝いで忙しいことはもう聞いていた。その合間の大事な楽しみをやめろとは言えない。高は中条をメンバーに引き入れるのはあきらめた。

結局、野球チームには12人もの参加希望者が集まり、高を喜ばせた。しかし、ちゃんと野球をやったことがある子は、高と広瀬を入れても3人だけだった。

7月最後の土曜日、12人のメンバーと監督は、中川の対岸の河川敷にあるグラウンドで初めて顔をそろえた。最初の問題は、チームの名前をどうするかである。

野球チームの名前には、たいていみんなその地名をつける。でも、このチームには、いったいどこの地名をつければいいのか。『落合』では、陽光台の子にはなじめない。『陽光台』だと落合の子は嫌がるだろう。『城江』では、城江の中心部のチームみたいだ。

「おれも考えてたんだがな、名前、『黒川なんか』でどうだ？」

「『黒川』あゝ!？」

監督の言葉に、高は思わず大声を出した。たしかに『黒川』なら、『落合』や『陽光台』みたいな問題は起こらない。でも黒川は、つい3週間前、陽光台を泥の海にした川なのだ。その後始末に、今もみんな苦勞させられているというのに……

「それじゃチーム名は、『黒川ドラゴンズ』ですか？」

黒川といえば竜、竜といえばドラゴンだ。高は皮肉を言ったつもりだった。それなのに、集まったばかりのメンバーは、その言葉にわっと盛り上がるではないか。

「おっ、いいじゃねーかそれ! どうだみんな」

「いいかも」

「賛成」

高はみんなの反応にあわてた。すぎるように周囲を見る。

「広瀬……」

「名前なんて、ごちゃごちゃもめるより、さっさと決めた方がいい」

「若槻……」

「このチームにピッタリの名前だよね。さえてるよフジノくん!」

「よし決まり!」

がっくりと肩を落としている高を見て、監督、つまり中条のおじいさんがぼーんと背中をたたいて行った。

「なあに、黒川の竜のやつだって、おまえらちびっこ竜が代わりに暴れてくれりゃ、スカッとしておとなしくなるってもんよ。さあ、練習はじめるぞ!!」

あの晩をさかいに変わったのは、高たち5年生だけではない。街全体が少し変わってきた。

前は、陽光台から落合の商店街へ行く人はほとんどいなかったし、落合から陽光台の方へ行く人もほとんどいなかった。なんとなく、お互い行き来を避けている感じがあった。

ところがあの土石流以来、そんな感じがうすれてきた。陽光台から落合へ買いものに行く人も増えたし、スーパーSSで開かれる趣味の会には、落合からも人が集まるようになった。

畑が泥と岩でうまってしまった鳥居のおばあさんは、陽光台の東側にある、放ったらかされていた畑を買って耕し、誰でも借りられる農園をはじめた。プロであるおばあさんにアドバイスをもらえるのが喜ばれて、陽光台からも落合からも、いろんな人が通ってきてにぎわっている。

高のお母さんも、最近はこちらよく落合の商店街まで行くようになった。どうも、集会所で知り合いになった人たちと話して来るらしい。

「やっぱりスーパーだけじゃつままないのよねー便利だけど。あそこじゃハンバーガーのお店くらいしかお茶飲めるところないし、スーパーの中だけじゃ、ぶらぶらしても楽しくないし」

言うことがコロコロ変わるのはお母さんの悪いくせだ。変わるといえば、原への評価も一変した。

「そうそうタカシ、電器屋さんの千歳ちゃんって、ホントいい子よねえー。ホラ、あの集会所に避難してるとき、みんなのためにって、タオルとかタオルケットとか、ご近所から集めてわざわざ持ってきて

てくれたのよ。濡れないようにポリ袋につめて、あの雨の中、あの小さい体で。お母さん感動したわ。あの子だったらいいわよタカシ、アンタが付き合うの！」

もちろん高は自分の部屋へ避難した。

高のクラスの『陽光台組』の中でも、落合の商店街へ行く子が増えてきた。

拓登は、高について商店街を通るうち、いつの間にか行きつけの店を増やしている。特におもちゃ屋の店先で、自由にためせるようになっていく木の立体パズルがお気に入り、店のおじさんにかかわれながら、通いづめてひとつひとつ完成させている。

「完成させるために買うんじゃないかって、完成させた後に買うのか？」

「ツウは戦利品として飾っとくん」

それから今宮が、よくひとりでこの商店街へ通ってきている。今宮の行き先は、駅の近くにある小さな写真店だ。

あれから聞いた話によると、今宮のお父さんは、去年の秋に亡くなったのだという。そして、お父さんが買ったきり使っていなかったあのカメラを、今宮がもらったのだ。

「……あのとき、父さんがいっしょにいたんだ。土石流の写真とろうとしてたとき」

「えっ？」

「カメラの設定変えてるとき、絶対、父さんがいっしょにいた。みんなバカにするだろうから言えないけど、分かるんだ。そこも変えなきゃダメだとか、そっちはこうした方がいいとか、絶対に聞こえた。おちついていけよって、はげましてくれた。あの写真は、父さんがとらせてくれたんだ。僕ひとりでやってたら、絶対、写ってなかった」

本当かどうかなんてたしかめようがない。今宮がそう言うならそうなのだろう。

土石流をとったあの写真は、城江のデパートで開かれた報道写真

展に特別展示された。それを見た写真店の高木さんが、大学時代の友達の子と名前が同じだと気がついて、今宮に連絡をくれたのだという。そしてそれ以来、今宮はよく高木さんのお店に、写真のとり方を教わりに行っているのだ。

写真部にいた今宮は、あれから新聞部に移り、石渡とふたりで取材に走り回っている。背が低くて元気な石渡と、背が高くておとなしい今宮は、絵に描いたようなでこぼこコンビなのだが、なぜか気が合うらしい。

その石渡と今宮を結びつけたのは、あの小さなカメラである。そしてそのカメラでとった写真が、今度は近くに住んでいた高木さんを引き寄せた。

「すごいだろ。父さんが会わせてくれたんだ。ちゃんと見守ってくれてるんだ」

そう高に話してくれた今宮は、前よりずっと明るくなった。今はクラスメートたちともよく遊んでいる。あのカメラは、本当にすごい『お守り』だったのだ。

9月の終わり、落合小学校の校庭で、黒川ドラゴンズ初の練習試合が行われることになった。相手は堀川パイレーツである。もちろん高が招待したのだ。

広瀬は当然のように勝つ気だったが、高はまず勝てないだろうと思っていた。夏の間、高校野球を見て盛り上がったチームメートたちは練習にはげみ、だいぶ腕を上げていた。が、なにしろみんな、ちゃんと試合をするのは初めてなのだ。草野球とはいえ経験豊かなパイレーツとは比べものにならない。だからチームメート以外には、試合のことは知らせないことにした。

ところが、中川のグラウンドで練習を終えた高たちが小学校へ着くと、校庭はすでに人であふれている。

まさか校庭の利用申請がちゃんとできていなかったんだらうか。あわてて近づいてみると、なんと一塁側のいちばん目立つところで拓登が派手な横断幕の片側を持ち、こちらに向かって手をふっているではないか。『かつとばせ！ 黒川ドラゴンズ！』と書かれたその横断幕の反対側は、春日が持っている。春日たち3人は、どこで見つけたのか、おそろいの黒い竜柄Tシャツで決めている。

「……『試合のことは他のやつに言うな』つつつといて、てめーがバラしたんだろ」

「……今度の週末、ワタたちと城江へ遊びに行かないかって拓登にさそわれたから、断ったんだよ。試合あるからって……」

「バカ」

広瀬に冷たく言われても文句は言えない。たしかに、拓登に言えばどうなるかぐらいは考えるべきだった。

「わあすごい。うちのクラスの子、何人来てるかな。1・2・3・4・5・6……」

本当に、たくさんの方々が来ていた。拓登の横では、メジャーリーグのキャップにユニフォームといういでたちの会田がメガホンをふっている。となりには、例によってジーンズ姿の山本、ピクニックバスケットを持った原まで来ている。

外野の方には、須坂団長以下、消防団の人たちがお花見のようにずらりと陣取っている。『元・消防団』のおじいさんたちや、武石さんまで混じっている。缶ビールをこちらへかかげて笑っている。他にも商店街から見に来ている人もいるし、陽光台の人たちもけっこう来ている。『観客席は満員』という感じだ。

「わあ見て、坂井のおばあちゃんたちだ」

「えっ!？」

若槻が手で示した方を見ると、少し離れたところに坂井さんたちがいた。折りたたみのいすに座ってほほえむ2人のとりには、当然のようにタロウがいる。

坂井さんたちはあの後、落合の小さな家へ引越し、飼主の人に頼んでタロウを引き取ってしまった。タロウの散歩は、足の悪いおじいさんに代わって、ボランティアの人や高、そして高たちのクラスで犬好きな子が交代することになった。

ところが、びっくりするようなことが起きた。なんと足の悪かったおじいさんが、タロウの散歩に出られるようになったのだ。最初は、おばあさんと2人でタロウの散歩に出ていたのだが、タロウに引張られるようにして、ひとりでも外を歩けるようになった。だから今は、朝の散歩はおじいさんがやっている。小学校の近くを、おじいさんに合わせてゆっくり歩いているタロウはなんだか誇らしげだ。

「すごい人だな。ばあちゃんたち、早くしないと場所なくなるぞ……」

初の試合ということで助っ人に来た中条が、感心したようにつぶ

やいている。

「『ばあちゃんたち』？」

「ああ、鳥居のばあちゃんが、おれたちにおにぎり作ってやるんだって、夏沢のばあちゃんとふたりでがんばってる」

「……なんでそんなに人来るんだ……」

高のなげきを見無視するように、人はどんどん集まってくる。グラウンドで練習していたパイレーツの面々が、高に気づいて集まってきた。

「おいタカシ、なんだよこれ」。なんかおれたちすっげーアウェーじゃん」

「ごめん。なんか話が漏れて、人集まっちゃって……」

久しぶりにみんなと会ったというのに、全然『久しぶり』という気がしない。なんだか昨日会ったばかりのような気がする。

「よう、タカシ。今日は勝つぞ！」

「お手やわらかに」

「タカシ、自分でチーム作っちゃったんだって？　すごいや」

「正樹こそ、あのホワイトソックスおさえ切ったんだろ？　聞いたぞ。おめでとう！」

「元氣そうだなタカシ」

「あっ島崎さん、久しぶり！」

「タカシくん、久しぶり」

かつての仲間たちとあいさつを交わしていると、高が抜けた後でキャッチャーになったという鹿島に声をかけられた。高が覚えていた鹿島は、ひよろつとしていて色の白い少年だったが、いま目の前にいる鹿島は、ずいぶん日に焼けてがっしりしたように見えた。

「僕、『富士見野が抜けたらパイレーツは弱くなった』って言わないようにがんばったんだ。今日はよろしく」

「よろしく」

まっすぐ目を見て手を差し出された。コイツは変わったなと思いながら、きつく握手を交わした。

「はじめるぞ！」

「整列〜！」

監督たちの声に、両チームの選手たちがいっせいにホームへ向かう。今日は、落合商店街の人たちが審判を引き受けてくれている。主審は原のお父さんだ。

ずらりと整列する。味方のドラゴンズも、相手のパイレーツも、みんな高の知っている仲間たちだ。不思議な気持ちで「よろしくおねがいします！」と頭を下げた。

顔をあげると、審判の後ろでこちらにカメラを向けていた今宮に気がついた。笑って親指を突き出したところを見ると、いい写真がとれたのだろう。相棒はどこかなと石渡を目で探すと、観客の中にお父さんの姿を見つけた。

青空の下、パイレーツの選手たちが守備位置へと散っていく。トップバッターの広瀬がゆっくりとバッターボックスへ向かっていく。審判が手を上げる。

「プレイボール！」

&l t; 2 l & g t; (後書き)

元々、「児童文学の賞」に応募するためではなく、以前はあまり知られていなかった土石流について多くの人、特に子供に知ってもらうための啓蒙小説として書き始めたものです。

が、しかし。子供に飽きずに最後まで読んでもらうには面白くなければならず、面白くしようと思えば退屈な展開にはできず、気がつけば「子供がこれ読んで真似したら困る」と親にねじこまれそうなとても啓蒙小説とは呼べないシロモノになってしまいました。

さらに最近では小学校の理科の授業で、土石流の仕組みについて教わるとか。学校でそういうことを教えてもらえるのは本当にいいことですし本当に良かったと思うのですが……資料集めと執筆の苦労を思うとちょっと空しくなってしまうのも本当だったり……

最後になりましたが、ここまでお付き合い下さった方（がおられるかどうか分かりませんが）、どうもありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6362p/>

竜の住む谷

2011年9月9日03時22分発行